社会福祉法人
和歌山つくし会

創業70周年記念誌

70th Anniversary

社会福祉法人 和歌山つくし会 創業70周年記念誌

70th Anniversary つくし

つなぐ想いを未来へ。

創業70周年記念誌
社会福祉法人 和歌山つくし会

70th Anniversary 1954~2024

岩出整肢園

こどもたちの幸せのために
支援を必要とする方々のために

和歌山つくし医療・福祉センター

つくしの里こども園

里親支援センター「なでしこ」

広瀬幼保園

広瀬保育所

タマ電車（現在）

つくし保育所の近くを走る貴志川線（過去）

桃山療護園

和歌山乳児院

和歌山市立和歌山乳児院

つくし保育所（旧和歌山乳児院）

つくし幼保園

社会福祉法人 和歌山つくし会 創業70周年記念誌

つくし

目 次

社会福祉法人 和歌山つくし会 理念・基本方針 …… 5
初代理事長　谷本 千鶴先生 …… 6
ご挨拶　社会福祉法人 和歌山つくし会 理事長　谷本 美佐子 …… 7
祝　辞　和歌山県知事　宮﨑 泉 …… 9
和歌山市長　尾花 正啓 …… 10
岩出市長　中芝 正幸 …… 11
和歌山つくし会 前理事長　中谷 博昭 …… 13
和歌山つくし会 元監事　増尾 穣 …… 14
「初代理事長 谷本千鶴先生の足跡」社会福祉法人和歌山つくし会 副理事長　森下 宣明 …… 15
「和歌山つくし会創業70周年に寄せて」社会福祉法人和歌山つくし会 常務理事　西上 邦雄 …… 17
「重症児施設の未来予想図」社会福祉法人和歌山つくし会 参与　林 龍太郎 …… 19
「創業70周年を迎えて」社会福祉法人和歌山つくし会 本部事務局長　中谷 政紀 …… 21

第一章　社会福祉法人和歌山つくし会の歴史

①社会福祉法人和歌山つくし会　創設期　和歌山乳児院・岩出整肢園 …… 23
②社会福祉法人和歌山つくし会　中期　乳児院・幼保園・こども園の歴史 …… 25
「感謝いっぱいの思い出」社会福祉法人和歌山つくし会 理事 つくし幼保園名誉園長　岡 孝江 …… 27
「和歌山つくし会での思い出」社会福祉法人和歌山つくし会評議員　溝浦 美智子 …… 28
桃山療護園の設立 …… 29
「桃山療護園での想い出」社会福祉法人 和歌山つくし会 本部事務局次長　和田 万智子 …… 30
③社会福祉法人和歌山つくし会の歴史　現代に向かって
和歌山つくし医療・福祉センター誕生まで …… 31
「思い出」社会福祉法人 和歌山つくし会 評議員　木村 晴美 …… 32
④第2種社会福祉事業 里親支援センターへの道のり
社会福祉法人 和歌山つくし会 副理事長　森下 宣明 …… 33

第二章　社会福祉法人和歌山つくし会組織

組織図・法人概要 …… 35
役員一覧 …… 37
社会福祉法人 和歌山つくし会　社会福祉法人設立50周年記念式典 …… 39
社会福祉法人 和歌山つくし会　創業70周年記念式典 …… 41
創業70周年記念式典 ギャラリー …… 43
法人沿革 …… 45

第三章　各施設の概要

和歌山乳児院 …… 49
つくしの里こども園 …… 51
広瀬幼保園 …… 53
つくし幼保園 …… 55
つくし医療・福祉センター …… 59
地域在宅支援センター …… 71
里親支援センター「なでしこ」 …… 75

「谷本千鶴賞」・「つくしっ子特別賞」受賞者 …… 79
初代理事長 肖像画除幕式 …… 81

第四章　つくしジャーナルの発刊

話題になった記事のご紹介 …… 82
社会福祉法人 和歌山つくし会　職員一覧　2025年10月1日現在 …… 104
編集後記　「未来に向けて」 …… 109

社会福祉法人　和歌山つくし会　理念

つくし

初代理事長 谷本千鶴先生の遺志を引き継ぎ、
世の子どもたち、障がいのある方、
社会的弱者のためにつくします

基 本 方 針

1. 人権尊重 (子どもたちや利用者の視点を忘れずに)
2. 地域貢献 (職員一人ひとりの責務として)
3. サービスの質の向上(医療・福祉サービスの向上に努めます)

和歌山つくし会 初代理事長 谷本千鶴先生

世のこどもたちの幸せのためにつくしたい

大正7年　現在の大阪府岸和田市に生まれた谷本千鶴先生は、無医村の医療に一生を捧げた父の後ろ姿を見て育ち、自らも医師になることを決意。その後、戦後の悲惨な状況を見て「こどもたちの幸せのためにつくしたい」という思いを強くし、昭和29年の私設保育所の開所に始まり、私財を投げうってこどもたちや障がいのある方々のための施設を次々に開設されました。

昭和32年　「和歌山市立乳児院」の運営を受託
昭和41年　「財団法人和歌山つくし会」を設立、理事長に就任
昭和43年　「岩出整肢園」（後の岩出療育園）を開設
昭和44年　「社会福祉法人和歌山つくし会」が設立・認可され、理事長に就任
昭和48年　「和歌山市立乳児院」が廃園し、「和歌山乳児院」を新築
昭和50年　「広瀬保育所」を開設
昭和51年　「つくし保育所」「桃山療護園」を開設

5つの施設を相次いで開設するとともに連日、各施設を巡回し、医師として診療業務を行い、その激務のためもあり、昭和57年に急逝されました。いつも笑みを絶やさず、園児、入所児、患者、さらに職員のことを一心に気遣い、慈愛に満ち溢れたその姿は、「和歌山つくし会」の心の支柱であり、未来永劫その象徴であります。

ご挨拶

社会福祉法人　和歌山つくし会
理事長
谷本　美佐子

和歌山つくし会は2024年に創業70周年を迎え、10月26日に70周年記念式典を開催させて頂きました。これまでにご支援を頂きました関係者の皆様、又お忙しい中を記念式典にご出席いただいた皆様に心より厚く御礼を申し上げます。

2025年は世界で様々な出来事がありました。いたる所で平和が求められながらも戦争が終わらず、平等が求められながらもますます広がる格差、道徳的な価値観が求められているのにそれが覆されてしまうアンビバレンス、紛争や暴力がより激しくなり理想と現実の乖離がさらに大きくなったように感じられた一年でした。

日本では昭和100年を数え、初の女性宰相が誕生し、戦後80年目にして何かが大きく変わりそうな期待と不安を胸に新しい年が明けました。

一層現実化してきた人口減少、少子高齢化、年々激しく変化している社会情勢の中で私達社会福祉法人はどのようにあるべきか、何を改善していくのか、今後福祉を必要とされる方々のセーフティネットとして一番良い形の事業形態は如何なるものか、さらに持続可能性をより高め利用者はもちろん職員の生活を守るにはどうすれば良いのか、模索する日々が続いています。

和歌山つくし会は1954年に私の母　谷本千鶴初代理事長により「世のこどもたち、障がいのある方、社会的弱者のためにもっと身をつくしたい」という理念によって最初の公益的な事業が立ち上げられました。現在の事業は次の３つの柱で成り立っています。

1．「和歌山乳児院」、里親支援センター「なでしこ」を中心とする社会的養護を必要とするこどもたちの支援
2．医療型障害児入所施設・療養介護事業所「つくし医療・福祉センター」、「地域在宅支援センター」を中心とする重症心身障害児・者、発達障害児・者などの支援
3．認定こども園「広瀬幼保園」、「つくし幼保園」、地域型認可保育所「つくしの里こども園」を中心とする子育て支援

和歌山つくし会ではこれらの施設を利用するこどもたちや保護者の皆様のために医師、看護師、介護福祉士、保育教諭、保育士、訓練士などすべての職員の創意と協働の取り組みの中で支援を行ってまいりました。

70年前の社会福祉法が成立して間もない頃は、まだ戦後の傷跡が残っており、母・谷本千鶴が３人の仲間と共に開始した事業は1969年に社会福祉法人として認可されました。その後、役職員の手から手へと引き継がれ、2025年10月1日現在、6施設となり、425名の職員が勤務しています。

思い返してみると、母亡き後、和歌山つくし会の将来の事業のために谷本家の土地を引き継いだのは1982年のことでした。当時私は他の仕事をしており、海外に居住することもありましたので、現在のようにつくし会に勤務することは全く予想だにしておりませんでした。

2003年の措置から利用契約へという社会福祉事業の大きな構造改革を経て、2005年に和歌山つくし会の２つの重症心身障害児施設「岩出療育園」と「桃山療護園」が「和歌山つくし医療・福祉センター」として統合された時、そして2012年に和歌山乳児院が和歌山市森小手穂からつくし医療・福祉センターの隣接地に新築・移転した際に自分が引き継ぎ、保有していた土地を提供させて頂くことになりました。大変広い土地でしたので、私個人で長期保有することについてはたいそう苦労があり、家電製品やごみを不法投棄されてしまったり、近隣の方々に手入れのお世話になるなど色々なお助けを頂きました。

元法人事務局長 中谷義美先生にはいろいろと教えて頂き、随分とお世話になったと思います。

和歌山乳児院が新築移転された時は、母から土地を引き継いだ後30年が経過しており、工事が完了したときには心から安堵したことを覚えています。長年肩にかかっていた創業家の一員として両親から申し送られた責任がわずかながらでも果たせたように思いました。

前会長川口吉雄先生（当時理事長）の時代、医療・福祉センターの新築は和歌山つくし会の長い歴史の中でも大変な一大事業であり、建築やデザインに造詣の深い前理事長　中谷博昭先生が日本各地に足を延ばして研究され、ステンドグラスの買い付けなどもしてくださいました。

二つの重症心身障害児施設が合併、新体制となり、名誉院長（故）月野隆一先生(当時院長)の指揮のもと、新しい医療・福祉の時代が幕開けしました。２代目院長は重度障害者医療と医療的ケア児支援のパイオニアである元和歌山県立医科大学紀北分院院長の飯塚忠史先生（現在地域在宅支援センター長）、３代目院長に和歌山県立医科大学 名誉教授（元小児科教授）の鈴木啓之先生を迎え、一層充実した医療、看護、介護、リハビリテーションを行っています。

保育所であったつくし保育所と広瀬保育所は2015～2016年に全国でもいち早く「幼保連携型認定こども園」となりました。つくし保育所は2010年に和歌山市森小手穂から和歌山市吉礼に新築移転しました。

私は2019年末に理事長として勤務するようになりました。突然の予期しなかった出来事でありましたが、広い意味で法人に変化が求められていた時期であり、一昔前と比べて事業規模が拡大していることから運営や経営について客観的な見直しの必要性が感じられました。

念願であった「谷本千鶴基金」を設立し、専門職員の高額な研修費の補助の他、機関誌の発行や事業の補助、功績の顕著な職員やグループに「谷本千鶴賞」「つくしっ子特別賞」などの表彰を行うことが出来るようになりました。将来は世界に羽ばたいて行く職員のための留学支援や海外の施設との交流なども行いたいと考えています。

45年以上勤続し、和歌山つくし会の支柱である森下宣明副理事長（里親支援センター「なでしこ」センター長）、林龍太郎参与、岡孝江つくし幼保園名誉園長と共に法人中枢を再構築し、法人本部に西上邦雄常務理事、中谷政紀事務局長、和田万智子次長を迎え、創業71年目が始まりました。

つくし幼保園　佐伯正季園長、広瀬幼保園　上垣内康弘園長、和歌山乳児院　小浦由佳里院長、つくしの里こども園　石倉芳美園長他、職員の皆さんの献身的な尽力は言うまでもなく、和歌山つくし会の現在と確実な未来を形作るものであり、大ベテランから新卒職員まであらゆる年代の職員の皆様がそれぞれの持ち場で職責を果たしています。

何よりも利用者さんの笑顔のために、より魅力のある社会福祉法人を目指し、現在和歌山つくし会では各施設ともに様々な工夫がなされています。

これからもご支援いただいている皆様にお応えできますよう、一丸となり励んで参りたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

祝辞

和歌山県知事
宮﨑　泉

「和歌山つくし会」が、創業70周年という記念すべき節目を迎えられましたこと、そして、これまでの歩みが綴られた記念誌を発刊されますことを、心からお喜び申し上げます。

また、貴会におかれましては、平素から県政の推進に格別の御理解、御協力を賜っておりますことに、厚く御礼申し上げます。

「世のこどもたちの幸せのためにもっと身をつくしたい」。昭和29年10月、戦後の混乱が色濃く残る激動の時代に、谷本千鶴初代理事長が、その高い志と献身の精神のもと、和歌山市内に私設保育所を開所したことが、「和歌山つくし会」の原点であります。そして、現在では、県内で唯一の乳児院である「和歌山乳児院」をはじめとする６つの施設を運営しておられます。

創業以来、常に利用者一人一人の尊厳を大切にしながら、障害者支援や児童福祉など多岐にわたる活動を通じて多くの方々の生活を支えてこられ、地域に根差した福祉の担い手として御尽力いただいておりますことに、深く敬意と感謝を表します。

家族形態の多様化や地域コミュニティの希薄化、少子高齢化の進展など、福祉を取り巻く環境は大きく変化し続けていますが、「和歌山つくし会」が、70年という長きにわたり培われた経験と確かな実績、そして、地域から寄せられる厚い信頼は、これからの地域福祉の未来を切り拓く上で大きな力となるものと確信しております。

県といたしましても、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができる社会の実現に向けて、様々な障害の特性や障害のある方に対する理解を深める「あいサポート運動」のほか、こどもの居場所づくりや児童虐待防止対策、里親制度の推進等の各種施策に取り組んでまいりますので、皆様には、今後とも御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、「和歌山つくし会」の今後ますますの御隆盛と、関係の皆様の御健勝と御多幸を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

祝辞

和歌山市長
尾花　正啓

このたび、社会福祉法人和歌山つくし会が創業70周年を迎えられ、ここに記念誌を発行されますことを、心からお慶び申し上げます。

平素より、和歌山つくし会の皆様方には、保育・医療・介護の各分野において、地域に根ざした温かい支援を長年にわたり積み重ねてこられ、児童福祉の向上に多大なるご尽力を賜っておりますことに、深く感謝申し上げます。

昭和29年に保育所を開所されて以来、和歌山つくし会におかれましては、障害の有無にかかわらず、一人ひとりが大切にされ、命が輝く社会の実現を目指し、時代の変化とともに多様化する社会的課題に真摯に向き合ってこられました。

こうした歩みの中で、「福祉」と「子育て支援」を分け隔てることなく一貫した視点で提供され、個々のニーズに応じて支援の幅を広げてこられた歩みは、和歌山つくし会の確かな歴史そのものであると存じます。

今日においては、和歌山市内 の 「つくし幼保園」「広瀬幼保園」 をはじめ、六つの医療・福祉施設を運営され、子どもが「 明るく・温かく・安心できる」環境のもとで育つことができるよう、家庭との連携を大切にしながら成長を支える保育と、きめ細やかな専門的支援を実践されており、これらの取組を通じ、切れ目のない支援体制を構築され、多くの市民の安心と暮らしを支えておられます。

乳幼児期という人格形成の基礎が培われる重要な時期において、こども一人ひとりの思いや育ちに丁寧に寄り添い、誰一人取り残さない支援を実践され、地域に根ざした確かな歩みを重ねてこられましたことに、深く敬意を表します。

近年、少子化や核家族化、地域のつながりの希薄化が進む中、子育て家庭を取り巻く環境は一層複雑化しています。こうした中で、和歌山つくし会が果たされている役割は、今後ますます重要性を増すものと考えます。

和歌山市といたしましても、すべてのこどもが安心して育ち、保護者が希望をもって子育てができる環境づくりを目指し、引き続き子育て支援施策の充実に取り組んでまいります。

結びに、和歌山つくし会が70年にわたり培ってこられた理念と実践が次代へと確実に受け継がれ、今後ますますご発展されますことを心より祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

祝辞

岩出市長
中芝　正幸

このたび、社会福祉法人和歌山つくし会の「創業70周年記念誌」が発刊されるにあたり、心よりお祝い申し上げるとともに、70年という長きにわたり、地域福祉の礎を築き上げてこられた貴法人に対し、深く感謝申し上げます。

貴法人は、昭和29年の私設保育所開設以降、岩出市においては昭和43年に「和歌山つくし医療・福祉センター」の前身である「岩出整肢園」を設立し、さらに平成24年には「和歌山乳児院」を新築移転し、同施設内に「つくしの里こども園」を開園されました。これらの活動を通じて、貴法人は地域に開かれた施設として、福祉活動を広く展開されてこられました。

とりわけ、「つくす」という法人の理念のもと、保護者との生活が困難な乳幼児の養護や多様な障害福祉サービスを提供し、子どもたちや障害を持つ方々を一貫して支援してこられました。また、地域住民との深い信頼関係を築き上げ、その活動は地域福祉にとって欠かせないものとなっています。これもひとえに、初代谷本千鶴理事長をはじめ、歴代の役員や法人職員、施設職員の皆様方の熱意と努力の賜物であり、改めて深く心から敬意を表します。

近年、社会福祉を取り巻く環境は急速に変化しており、少子高齢化や地域における孤立化の進行により、福祉に対するニーズはますます多様化、複雑化しています。こうした中で、今後は福祉サービスを受ける方々と地域住民が協力し、支え合う「地域共生社会」の実現に向けた取り組みが一層求められています。

市といたしましても、貴法人をはじめとする関係団体の皆様と連携し、市民が住み慣れた場所で安心して暮らせる地域づくりを進めるとともに、災害時などの困難な状況においても地域住民を支える体制をさらに充実させ、お互いに支え合う地域社会の実現に向けた施策を推進してまいります。

結びに、社会福祉法人和歌山つくし会の今後益々のご発展と、関係者の皆様のご健勝、ご多幸を心より祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

～根來寺（岩出市）の春夏秋冬～

祝 辞

社会福祉法人　和歌山つくし会
前理事長
中谷　博昭

私は、県の教育行政や一般行政を務めた後、父の後を継いで和歌山つくし会本部事務局長につき、約二十二年間務め、後半には、創設者の谷本千鶴先生から数えて、第七代目の理事長を務めました。

昭和40年頃、乳幼児の重度障害施設を設立するため、郊外の静かで空気の良い場所を探し求めておられた谷本千鶴先生は、つくし医療福祉センターの前身である岩出整肢園（後の岩出療育園）設立の相談のため、岩出市にある私の家にしばしば来られていました。私の父が千鶴先生の小学校時代の恩師であった、というご縁もあり、色々と相談を頂まして、岩出整肢園は岩出町中迫に建設されることになりました。

千鶴先生は、行政による法人の許認可や助成金を得るため、まさに東奔西走され、その上多額の私財を投じて、社会福祉法人和歌山つくし会を創設されました。

私は、千鶴先生の姿を身近に見ていたため施設の再建にあたり、先生の想いを活かして「明るくて暖かい施設づくり」を目標に、ヨーロッパに見られる「宮殿風」の「青い屋根」「茶系統の外壁」「白い窓枠」を基調に、大村順一設計事務所さんと共に、役・職員をはじめ多くの方々のご協力を得て、全施設を新しく建て替えました。

総事業費は、かなり高額になりましたが、借り入れ金なしに、すべて法人自費と国・県・和歌山市からの助成金のみで、全施設を新しくすることが出来ました。
また、時代を先取りする事業にも力を入れ、将来にわたる日本の人口減社会に対応して、日本の発明・発見能力を高めると共に、本人の幼児教育にも力を入れ、保育所でありながら幼稚園の機能も備えた、幼保連携型認定こども園を吉礼の地に新築移転しました。この施設は、和歌山県内で最初であったことから、国会議員の先生も視察に訪れてくれました。

なお、「明るくて暖かい」施設内にするため谷本美佐子さんと私とで購入資金を出し合って、モネの「印象・日の出」の絵をはじめ、ルノアール、ドガ、ピサロ、シスレーの「印象派の五大巨匠」等同派の多くの画家たちの絵画を施設内に飾っています。

乳児院内の「岸本文庫」も、岸本先生が国会議員時に寄贈されたものです。

私は、近く卒寿を迎える今も「明るくて、暖かい」気持ちで、百五才迄活躍された日野原重明記念新老人の会和歌山の世話人を、楽しく元気につとめています。

祝 辞

社会福祉法人　和歌山つくし会
元監事
増尾　穣

和歌山つくし会の創業70周年誠におめでとうございます。

70年前谷本千鶴先生が「子どもたちや障害のある方々のためにつくしたい」との思いで保育所事業を創設されて以来、乳児院や重症心身障害児施設など現在にいたるまで種々の施設を展開されてきたことは今日の複雑で混沌とした社会を見通した先見の明を発揮されたものであり、心から感謝と祝意を申し上げたいと思います。

私は同級生で親友の中谷前理事長から2017年に評議員、翌年監事への就任を依頼され8年間お世話になりました。自宅からほんの近くに所在し岩出整肢園という時代からなじみのある施設でありながら不勉強のためその業務内容は殆ど存じませんでしたが、実際入ってみて職員の皆様のされている仕事の重要性と崇高性に改めて感銘を受けました次第です。特に被虐待児、病虚弱児など恵まれない子どもたちをお預かりしている乳児院、里親支援センター「なでしこ」、また地域社会の人々の介護支援などは今後高齢化社会の時代に向けて益々重要になってくるものと思いますので一層の拡充をはかって頂きたいと考えております。

私は企業で長く経理部門を担当しておりましたこともあり、つくし会の経理状況にも関心がありましたが、外部のコンサルタントや公認会計士の指導も受けながらしっかりと適切に処理されていることを確認いたしました。

社会福祉法人としてのつくし会の役割の重要性は今後も変わることなく今まで以上に重要になってくるものと思われます。役職員の皆様がこれからも「つくす」という理念のもと一致協力され社会福祉の向上のため頑張って頂きたいと願っております。

初代理事長 谷本千鶴先生の足跡

社会福祉法人 和歌山つくし会
副理事長
森下　宣明

今はもう、千鶴先生のことを語れる方は少なくなりました。
つくし会の沿革誌を紐解いて、当時を振り返り、千鶴先生の足跡を辿ってみたいと思います。

昭和29年10月、有志4人（谷本千鶴氏、大森正恵氏、湯口美智氏、高垣たか子氏）で、和歌山市城北地区において私設の保育所を開設。（参考1）

当時の世相はというと、戦後復興により、巷にあふれていた孤児、浮浪児対策も一段落し、救貧対策も終わりつつあったが、千鶴先生が和歌山市中之島で夫の紀次郎先生（つくし会2 代、4 代理事長）と営んでいた谷本産婦人科医院には、明日の暮らしにも事欠き、出産しても、すぐに就労しなければならない母親たちの受診が後を絶たなかった。

その様子を見かねた千鶴先生が、上記の3人の有志に相談し、和歌山市城北地区の片隅で私設保育所を開設し、子どもたちの受け入れを始めた。

子どもたちを受け入れ始めて、その背景に驚愕するとともに、運営の大変さに気づき、当時の高垣善一和歌山市長に相談するとともに、自分でも児童福祉法等を猛勉強し、昭和31年10月1日、和歌山市立乳児院（定員30名）の開園にこぎつけた。（参考2）

一方、昭和30年代前半は、乳児の死亡率も高く、乳児院の側に墓地が必要であるというようなことも言われていた。

昭和31年の経済白書では「もはや戦後ではない」と宣言し、「神武景気」「岩戸景気」ともいわれる好景気が続き、昭和39年の東京オリンピックの開催など、経済成長は社会にも大きな影響をもたらした。そのような好景気により乳児院の制度も改善され、乳児院の子どもの身体発育面は、ほぼ良好となったが、精神発達面については不十分なところが多く、このためホスピタリズム論議が活発になり、施設入所児はホスピタリズムの代名詞のように言われた。

千鶴先生が全国乳児福祉協議会（以下、「全乳協」という。）に常任委員として参画したのは、昭和38年度からですが、すぐに予算対策委員となり、重症心身障害児施設の草分けとなる小林提樹先生や大島一良先生などとの交流を重ね、今後の社会福祉の動向を把握し、障害児支援へと突き進んでいくことになりました。（参考3）

昭和41年3月、財団法人和歌山つくし会設立（昭和44年12月24日解散）
昭和43年8月1日、肢体不自由児施設「岩出整肢園」開設（定員50名）
昭和44年12月25日、社会福祉法人和歌山つくし会設立
昭和45年6月4日、岩出整肢園を重症心身障害児施設に変更
昭和48年8月1日、和歌山乳児院開設（定員40名）（和歌山市立乳児院廃園）
昭和49年4月1日、つくし保育所開設（昭和50年5月31日廃止）
昭和50年6月1日、和歌山市立広瀬保育所運営委託開始
昭和51年4月1日、つくし保育所開設
昭和51年7月1日、桃山療護園開設（定員50名）
昭和55年6月1日、岩出療育園第2病棟増築（定員80名）

この間の15年間は、多くの方々の協力はあったと思いますが、当初の志にのっとり、まさに怒涛の勢いで、子どもたちのために身を尽くしてこられました。

毎日複数の施設の間を飛び回り、診察業務を行い、その傍らで、新たな計画を企画し、困難な交渉に立ち向かっていました。

財政的には、まさに綱渡りの状況ではあったが、紀次郎先生の理解と岩出整肢園、岩出療育園、桃山療護園の外来患者が戸外まであふれるぐらい盛況をきたし、その収入で賄うことが出来た。
（その構図は現在の各施設の建て替えにも反映されている。）

昭和57年12月11日、日頃の激務がたたり、和歌山市小倉に重症心身障害児施設「小倉療育園」の開設準備を進めている最中に急逝された。（享年満64 歳）

生前は、いつも微笑を絶やさず、園児、入所児、患者、職員のことを一心に気遣い、慈愛に満ち溢れた、その姿は没後40年近くが経った今日でも「社会福祉法人和歌山つくし会」の心の支柱として生き続けています。

「世の子どもたちの幸せのために、もっと身を尽くしたい」

参考1

大森正恵氏: 後に児童養護施設、和歌山市旭学園を創設
湯口美智氏: 林参与の叔母（つくし会3 代理事長）
高垣たか子氏: 当時の高垣善一和歌山市長夫人

参考2

和歌山県には海南市立乳児院（昭和23年5月16日開園）と田辺市立双葉乳児院（昭和26年7月19日開園）の2か所の乳児院があったが、入所依頼は後を絶たず、和歌山市立乳児院も2年後には定員40名に増員した。

参考3

小林提樹先生:　島田療育園（現島田療育センター）初代院長)大島一良先生: 東京都立府中療育センター元院長（大島分類）

和歌山つくし会創業70周年に寄せて

社会福祉法人 和歌山つくし会
常務理事
西上　邦雄

「和歌山つくし会」は令和6年（2024年）に創業70周年を迎え、10月26日（土）に創業70周年記念式典を開催いたしました。式典には、各界から多数のご来賓の皆様にご出席頂き簡素ではありましたが粛々と行われ、「和歌山つくし会」の70周年をご参会の皆様方とともにお祝いいたしました。

初代理事長の谷本千鶴先生が、戦後の混乱期から復興に突き進む社会の陰で子供たちが厳しい環境に置かれているのを目の当りにされ「子どもたちのために」何かしなければという思いから「子どもたちや障害のある方々など社会的弱者の皆様のためにつくす」との理念を掲げ、昭和29年（1954年）に保育事業を始められてから丁度70年目にあたります。

また、令和6年は、明治維新から数えて157年になります。その半分近くにあたります70年という年数の長さと「つくし会」を支え、発展させてこられた先人の皆様のご苦労を考えたとき、その重みに圧倒される思いがいたします。

現在の「和歌山つくし会」は、6施設を運営し、400人を超える職員を抱える、県内では和歌山県福祉事業団に次ぐ有数の法人となりましたが、ここに至るまでの職員の皆様のたゆまぬ努力と情熱に、又行政の皆様や地域の皆様の温かいご理解とご支援に敬意と感謝を表する次第であります。

70年という節目は、私たちの歴史を振り返り、創業時の理念を再認識するとともに「和歌山つくし会」の未来に向けた新たな一歩を踏み出す大事な機会でもあります。

70年前と比べ現在の社会は、大変なスピードで変化しており、AIやIOT、ロボティクスなどの技術革新、又少子高齢化や人口減少が急速に進むなど社会のあらゆる面で非常に変化の激しい時代であります。特に、2030年問題、2040年問題と言われる、少子高齢化・人口減少問題ですが、昭和49年（1974年）に合計特殊出生率が人口置換水準の2.07を下回って以後低下を続け、国や地方の努力にもかかわらず令和６年（2024年）には1.15となり、将来的に人口がほぼ半減する水準まで低下し続け、いつ下げ止まり反転するのか不透明な状況であります。

こうした急激な人口減少により、当然ですが生産人口が減少するとともに労働力人口も減少し介護を担うべき人材不足が益々大きくなりますし、財政的な側面においても、障害福祉サービスの財源となる国・地方の税金や社会保険料等が人口減に伴い減少することにより、診療報酬の圧縮傾向と併せて療養介護事業への影響が懸念されます。さらに、介護保険制度についても保険料を負担する現役世代の減少により保険制度として財政的に厳しくなる状況が予想されます。

少子高齢化の進展とともに急激な人口減少が続き福祉事業を取り巻く環境が益々厳しくなる中、多様化するニーズに対応し社会環境に適応したサービスを提供できるよう、まず人材の確保・育成に努めるとともに事業の多角化・多機能化や福祉事業を補填するための収益事業などの検討も進めて、「和歌山つくし会」として今後80年、100年と次世代に引き継いでいけるよう持続可能な経営を追求しなければならないと思います。

さらに、創業以来、職員の皆様が日々の努力の積み重ねの中で連綿と継承してきた「つくし会の理念と使命」を見失わず、より質の高い支援を提供できる「つくし会」でありたいと思いますし、福祉事業を通じて地域社会に貢献し続ける存在でありたいと思います。

最後に、これまでの70年に感謝を、そしてこれからの未来に希望を込めて職員の皆様とともに新たな挑戦をしていきたいと思います。
引き続き、温かいご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

重症児施設の未来予想図

社会福祉法人 和歌山つくし会
参与
林　龍太郎

法人70周年を迎えるにあたり、これからの重症児施設は、どのような方向に向かうのかを私なりに未来予想図を考えてみました。

今現在の厚生労働省やこども家庭庁の審議会や委員会を参考に私見を話させていただきますが、過去の振り返りも必要だと考え今日に至るまでの経過も少し話させていただきます。

まず、1948年に児童福祉法が制定されましたが、重度の障害児は対象となりませんでした。日赤産院小児科医として勤務されていた小林堤樹先生が1961年に島田療育園の初代園長となり厚生省に働きかけ、1963年厚生事務次官通知において初めて重症児の概念が明確化されました。しかし、当時、18歳以上は入所対象から外されていました。

その後、重心心身障害児者を守る会が結成され年齢制限の撤廃を訴え1967年児童福祉法が改正され、重症心身障害児施設が法制化され同時に年齢撤廃され児者一貫制度が実現されました。翌1968年には和歌山つくし会は肢体不自由児施設岩出整肢園を開園し、その後、1970年に肢体不自由児施設から重症心身障害児施設(当時は全国に30数か所)に短期間で変更されましたが、なぜ、初代理事長　谷本千鶴先生が肢体不自由児施設から重症心身障害児施設に移行したかといいますと、児者一貫を考え、収支を考えての移行であり、先見の明が大いにあられ、今日の経営基盤を作られたと思います。1979年には養護学校義務制が実施されましたが、そのことにより、創設者高木健次先生による肢体不自由児施設の入所者が施設から在宅へとなり、入所児童が激減し民間の肢体不自由児施設から重症児施設へと変わっていきました。1990年に通園事業も実施(現多機能事業所)されました。2006年には18歳以上を対象とした障害者自立支援法が施行され、障害福祉サービス体系の見直し、利用者の1割負担、国の財政責任の明確化もされました。2012年にはつなぎ法が施行され18歳未満は医療型障害児施設、18歳以上は療養介護となりましたが、現状を考えて児者一貫は継続されました。その後、障害者総合支援法が成立され、2017年には医療型障害児施設と療養介護の児者一貫の特例措置が恒久化され2018年に障害者綜合支援法及び児童福祉法の一部改正があり、2021年には医療的ケア児支援法が施行され今日に至っています。

特に2017年に医療型障害児施設と療養介護に名称が変わるとともに措置から契約へと大きな出来事でした。措置から契約に代わると収入で考えると月額固定から利用日数への支払いとなり、利用者個人の支出もほぼ0円から数万円の負担となりました。

では、ここから少し予想していきますと2040問題(高齢者人口がピーク達し、全人口の35％を占め労働者不足、社会保障費の増加、地域コミュニティの崩壊「若年層の都市部への流失により地域医療や福祉の撤退」)が予想されており、厚生労働省も今年度より「2040年に向けたサービス提供体制などのあり方」検討会をスタートさせています。昨年5月の検討会において、分野を超えた総合的な福祉サービスの推進に向けて、これまでも共生型サービスを創設するとともに、高齢者、障害者、児童等に対して複数のサービスを総合的に提供する上での人員・設備の兼務・共用等が運用上可能な事項についてガイドラインで示すなど、今後、柔軟対応についての方策を考えるとしています。

という事は、これからは複合施設への方向が考えられます。とりもなおさず、あと15年で、施設の方向を検討しなければならないかと思いますが、今から15年前(2010年)に岡山旭川荘前理事長の末光先生が10年後の重症児施設について、地域福祉が充実し入所者の高齢化により自然退所の増加で利用者の数が半減するとの提言がありましたが、現実は施設数も10カ所以上、入所数も増加しています。そう考えると取り越し苦労と考えてもいいのでしょうか。

ただ、法人としては、職員の雇用維持や建物の改築等経営上を考えるとそうもいかないと思います。安易に利用者減による定数削減等を実施すると職員の不安や雇用維持に問題が起こると考えられます。現在、医療的ケア児の問題がクローズアップされ、重症児イコール医療的ケア児と捉えられていますが、重症児とは障害区分が5または6以上で知的障害と身体障害を併せ持った人となっていますが、特例的に強度行動障害も含みます。

そのため、医療的ケア児者の入所にとらわれず、在宅におられる広域な重症児者の方々に安心して施設利用いただける体制(面会や外泊等の自由化、設備の見直し等)作りや他施設の生活介護で医療を必要する方々へのアプローチ等も検討する必要があると考えます。また、重症児協会では児者一貫体制を取っており、18歳未満で障害が発生していないとつくし医療・福祉センターには入所できないこととしています。そのため、中途障害(18歳以上で発生)を持たれた方も対象に入所をしていいだくことも検討の価値はあります。ただし、近隣の病院でも障害者入院基本料で中途障害者を受け入れており、一般病院と同様となることから、今後の診療報酬への影響も課題です。これからの検討会の動向をみながら、皆様と協議して施設の在り方を考える必要があると思います。

創業70周年を迎えて

社会福祉法人　和歌山つくし会
本部事務局長
中谷　政紀

和歌山つくし会が創業70周年を迎えました。

1954年（昭和29年）10月に私設保育所を開所したのが始まりでありますが、その後、和歌山乳児院の運営、岩出整枝園の開園、広瀬保育所の運営、つくし保育所の開所、桃山療護園の開園など事業を拡げられました。今のように、地域福祉が確立されているような状況ではなく、手探り状態の施設の運営ではなかったかと思います。創業された谷本千鶴先生をはじめ草創期の役職員の皆さんの、恵まれない子供たちを救わなければならないという確固たる信念と卓越した行動力により、困難な時代を乗り切り、施設が維持されてきたのだと思います。

社会情勢は時代によって大きく変わってまいります。戦後の混乱期から高度経済成長期、バブル崩壊による低迷期、デフレの時代、その時々に施設運営に対する新たな課題が突き付けられ、そのたびに知恵を絞り、汗を流し、懸命に努力してこられたのだと思います。

それら努力の結晶を受け継いだ私たち現職員は、和歌山つくし会がこれからも長く継続され、末永く多くの子どもたちや利用者さんのお役に立てることができるようにしていかなければなりません。

今は、時代の過渡期ではないかと思うくらい早い流れの中で新たなことが沸き起こっています。AIなどの技術改革とともに国益をかけた衝突も多く発生しています。
国内でもインフレ社会に突入しつつありますが、同時に高齢化社会、人口減少が進んで久しくなってきております。

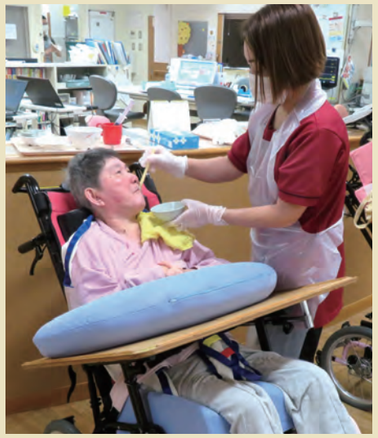
しかし、人口減少社会となり子どもの人口が少なくなっても、両親が共働きの世帯は増えてきております。児童相談所の児童虐待相談対応件数は増えています。医療の進歩、高度化により医療的ケア児は増えています。そして、施設から在宅介護への移行と言われていますが、逆に在宅の介護人の高齢化という問題もあります。

和歌山つくし会の各施設が、社会に貢献していく機会はまだまだ多くあり、これからも「つくす」ことを続けていかなければならないのであります。

私は、県の職員を定年退職した後、和歌山つくし会に就職させていただき、つくし医療・福祉センターの事務部長として４年、本部事務局長として1年が過ぎようとしています。70年の14分の1です。

初めて、つくし医療・福祉センターを訪れた時、職員の利用者さんへの対応を見たからでしょうか、何とも言えない優しい雰囲気を感じたことを思い出します。和歌山つくし会がこれからも長く社会に貢献し続けることを願い、自分のできることの最善を尽くしてまいりたいと思います。

つくす

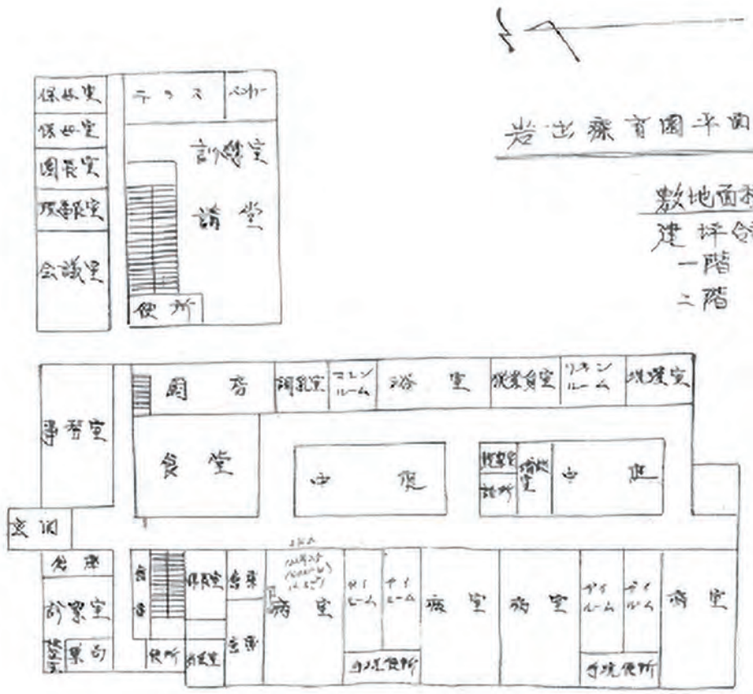


① 社会福祉法人和歌山つくし会 創設期（昭和29年～昭和48年）

岩出整肢園（後の岩出療育園）昭和43年8月1日開園当時のパンフレット。岩出療育園は後に桃山療護園と合併し、現在の和歌山つくし医療・福祉センターとなる。当時は見渡す限りの農地の中にぽつんと建った一軒家のようであった。

昭和20年代のまだ戦後色が残っていた時代に、身寄りをなくした子どもたち、母親が受刑中の子どもたち、また置き去りにされた子どもたちの存在に心を痛めた谷本千鶴先生は昭和29年に私設保育所を始めました。その後昭和31年に和歌山市立乳児院を開院、昭和41年に財団法人和歌山つくし会が設立されました。そして昭和43年に8月に乳幼児肢体不自由児施設として「岩出整肢園」（後の岩出療育園）が開園されたのは画期的な出来事でした。それまでは、障害のある子どもさんたちは家庭で養育されることが一般的だったので、治療や各種機能の回復をはかる施設は、当時としては最先端のものでした。車いすの通れるスロープなども一般的にはなかったその時代、初代理事長自ら設計をし、建設にあたってはまず空気の良い郊外の土地探しから始まりました。宮城まり子さんが日本で初めての障害を持つ子の養護施設「ねむの木学園」を創設されたのも同年の4月でした。

和歌山つくし会が社会福祉法人として発足した昭和44年当時の定款には「第一条　この社会福祉法人は、重症心身障害児を収容して医療、訓練、教育を行い、また孤児、棄児、父母の死亡、病気入院、行方不明、離婚等の理由により、保護者がいない児童及び保育に欠ける乳幼児を養育、保育し将来健全な人間として独立自活するに必要な肉体と頭脳の基礎を作ることを目的として社会福祉事業を行う」とあります。「保護者のいない子ども、障害のある子ども、社会的弱者である子ども、あらゆる子どもたちは等しく幸せになる権利があり、それは私たち大人によって実現されなければならない。」という考えのもとに「和歌山つくし会」は設立されました。



昭和43年当時の入居者募集のためのパンフレットに載っていた手書きの見取り図。

当時の園児たち

施設内部

② 社会福祉法人和歌山つくし会 中期（昭和48年～平成20年）

乳児院、幼保園、こども園の歴史

昭和48年8月1日、和歌山乳児院が社会福祉法人和歌山つくし会により、和歌山市森小手穂の地で産声を上げました。

これに伴い、和歌山市片岡町にあった和歌山市立乳児院が廃院となり、入所児・職員が引っ越しとなりました。新しい建物は、6角形のサンルームが各室にあり、当時としては斬新な建物として、各方面から見学の依頼が後を絶たなかったほどです。

昭和48年8月　和歌山市森小手穂に新築された和歌山乳児院

和歌山市では、母親の就労が増えつつある一方で、3歳未満児と何らかの障害を持つ3歳以上児をお預かりする保育所が不足していて、地域の親たちからの要望も高まっていました。

それらの要望を受け、乳児院が引っ越した後の片岡町の建物でまず、3歳未満児の保育所をしようと動き出しましたが、大規模な改装が必要であったことから、昭和49年5月1日に新設の乳児院の2階を使って、「つくし保育所」を設立しましたが、本格的な運用に当たり、翌年の昭和50年5月31日で「つくし保育所」はその役目を終え、翌日の昭和50年6月1日から「広瀬保育所」としてスタートしました。

和歌山乳児院

つくし保育所は、当時の保育のニーズをうけて、乳児院の2階の空きスペースを利用して昭和51年4月1日に、3歳未満児と何らかの障害を持つ3歳以上児をお預かりする新たな「つくし保育所」としてスタートしました。

また、つくし保育所の利用者から小学生の学童保育をしてほしいとの声が多くあり平成13年3月、放課後児童健全育成事業を実施するため隣接地に学童棟を建設し、「つくしのびのびクラブ」を開始し、多くの学童を受け入れました。

つくし保育所

時は流れ、女性の本格的な社会参加を受け、共働き世帯が増え、保育のニーズはどんどん高まり、「広瀬保育所」は平成15年4月1日、現在地で改築し、廃園する和歌山市立城南保育所を吸収合併して、その園児を引き受け、定員120名にして就学前迄の保育をすることになりました。

昭和50年　広瀬保育所

一方「つくし保育所」は平成24年4月1日、和歌山市吉礼に新築移転と同時に「幼稚園の認可」を受け、「就学前の子どもに関する教育　保育等の総合的な提供の推進に関する法律」による認定こども園として0歳から就学前迄の教育・保育をすることになり、認定こども園「つくし幼保園」に生まれ変わりました。そして「つくしのびのびクラブ」は運営管理上の問題から保育を終了し、乳児院の建物と共に和歌山県福祉事業団が後を引き受けてもらうことになりました。

「広瀬保育所」も、平成28年4月1日からつくし保育所と同様に、幼保連携型認定こども園「広瀬幼保園」として、乳児保育から就学前までの教育・保育を実践することになり、質の高い幼児教育を提供し、ますます保護者の信頼を高めています。

一方、和歌山乳児院は、時代の影響をまともに受け、平成10年には暫定定員30名まで落ち込みましたが、平成12年度に議員立法で成立した「児童虐待防止法」により入所児が増え続けることとなり、建物の老朽化や和田川の氾濫など、森小手穂の地は子どもたちの安全・安心に応えられなくなり、平成24年4月11日、和歌山県の基金補助により、岩出市中迫の現在地に新築移転し、「つくしの里こども園」を併設し、また、病後児保育室「きらら」や里親支援センター「なでしこ」の事業を実施し、地域の子育て支援の拠点となっています。

和歌山乳児院　クリスマス会

現つくし幼保園 岡名誉園長　北谷 恵子 元栄養士

感謝いっぱいの思い出

社会福祉法人　和歌山つくし会 理事

つくし幼保園名誉園長　岡　孝江

和歌山つくし会、70周年おめでとうございます。

私が和歌山つくし会で働くようになりましたのは、昭和48年に和歌山市の臨時保母として勤務していたとき、初代理事長（故谷本千鶴先生）に乳児院へ雇用していただいたことに始まります。

翌年5月には乳児院2階に一時的に開所したつくし保育所（広瀬保育所入所予定児）の保育士として、50年6月には入所児と一緒に広瀬保育所へ移りました。

翌51年4月には地域の乳幼児保育の要望を受けて、乳児院の２階に新たに開所されたつくし保育所へ異動を言われ、保育所の運営を任されることになりました。入所対象児は、３歳未満児22名と軽度の障害を持った3歳以上児８名を預かるという和歌山市内では珍しい保育所の開所でした。運営においては１階の乳児院院長（故白貫俊学氏）や看護婦長、事務員さんが蔭になり日向になりご指導くださり大変心強く、なんとか遂行することができました。それにもまして、理事長先生からの励ましの一言は、嬉しくて心の支えとなり、頑張ることができたと思います。

また、定員が30名の小規模であったことから、保護者の協力を得ながら家庭的な雰囲気の中で、子どもたちが安心して基本的な生活習慣の獲得と、様々な遊びを通して社会性の基礎を身につけることのできる保育に取り組めました。そうした保育のなかで嬉々と楽しそうに遊びまわる子どもたちが、たまらなくかわいくて、いつも心身が癒されました。しかし、毎年３月になると３歳の年齢で、他園に送り出さなければならないことには心が痛みました。

保護者も同様に年々就学までの保育の希望が増えて、平成18年には請願書がだされました。当法人でも就学までの保育について検討を始めかけていた矢先、和歌山市が現在のつくし幼保園の地で、吉礼にある「市立西山東保育所」を閉園し、社会福祉法人に対して幼保連携型認定こども園を建設する公募がありました。急いでヒヤリングに臨んだ結果、当法人に決定していただけました。

園舎の建設に当たっては、吉礼地域の連合自治会長宮脇茂さん始め、地元の多くの皆様方の温かなご理解ご協力を得ながら進めることができました。おかげで平成22年４月に和歌山市内で最初の幼保連携型認定こども園「つくし幼保園」として定員100名で開園することができ、念願の就学前までの教育ができるようになりました。現在では、定員135名となっています。このような園になるまでには、多くの皆様方のご支援ご協力のほかに、職員の労苦や活躍も忘れないようにしたいと思います。

令和8年４月には新園長に、佐伯正季先生が就任されました。佐伯先生はつくし保育所の保護者としてご協力いただいた方であり、なにかのご縁だと思っています。これからは佐伯先生を中心に職員と一緒に地域に貢献できる施設として発展していけるよう努めたいと思います。どうか、今後ともご支援いただけますようお願い申し上げます。

和歌山つくし会での思い出

社会福祉法人　和歌山つくし会評議員

（元つくしの里こども園園長）

溝浦　美智子

私が、社会福祉法人和歌山つくし会広瀬保育所(現広瀬幼保園)に入社したのが昭和57年でした。あの頃は、保育士が有り余っている時代で望んでいた正規職員になれたことが大変うれしくて、毎日子どもたちと関わって仕事する事に一生懸命だった事を今でも思い出します。

広瀬保育所は、0歳児から3歳児までの乳幼児保育所で定員が30名だった事もあり保護者の方との信頼関係もうまく築くことができました。行事があると、保護者の方が率先して手伝ってくださったりとても協力的な方が多かったのを思い出します。

そして、確か平成7年頃の園長先生でしたが、子どもたちのためにと、保護者同伴で海での海水浴をしたり、保育園のプールに海水を入れ、魚を泳がせて子どもたちに見せてあげたり、また、冬には運送会社のトラックに雪を積んできてもらい、子どもたちに雪遊びができるように用意したりと、すごい発想で子どもたちにサプライズを与えて下さった、そんな素晴らしい園長先生がおられたことも忘れることはできません。

次に赴任したつくし保育所(現つくし幼保園)では、とても熱心な園長先生の下で保育の楽しさを学ばせて頂きました。

保護者参加の行事が多かったので、準備等は大変でしたが、一つ行事が終わる度に達成感が自信に変わり、皆で協力し合うこと、何かを創り上げていく事の喜びを知ったように思います。それと同時に保育士ってやりがいがある仕事だなと教えてくれたのがつくし保育所での思い出です。

それから次に、つくしの里こども園に園長として着任させて頂きました。実際子どもと関わってきた立場から経営・運営の立場になり、何をしたらいいのか、何から始めたらいいのか途方に暮れましたが、つくし会の先生方から色々教えて頂き、何とかこども園の運営も軌道に乗せることができました。退職して2年ですが、つくし会での楽しかったこと、つらかったこと、数えきれない出会いや別れ、色々経験させてもらって本当に感謝しています。

これからも和歌山つくし会が益々発展していく事を心よりお祈りしています。

桃山療護園の設立

昭和43年に定員50名でスタートした岩出整肢園は昭和45年に病院開設の許可を受け、重症心身障害児施設に変更されました。昭和48年に岩出療育園と名称が変更され、満床となり増築、昭和55年に定員80床に拡充し、入所していた子どもたちがより成長してきたこともあり、谷本千鶴先生は成人も入所できる重症心身障害児施設の必要を考えました。入所者、通園者を含め、その人生に関わっていく、という発想は当時に生まれたものであり、現在の超高齢社会を予測したものでありました。

昭和50年に文字通り桃の郷である那賀郡「桃山町」で新しく重症心身障害児施設の着工が始まり、昭和51年7月に谷本千鶴先生が初代園長となり、「桃山療護園」が開園しました。当時は高齢者がくつろげるような畳の敷かれた部屋などもあり、アットホームな雰囲気で、「ここはこの方たちの一生のお家になるのですよ」と言いながら見守っておられた先生の和やかなお顔が印象的でした。

昭和54年に法律の改定により、障害のために学校に行けなかった子どもたちが養護学校に通うことが出来るようになりました。昭和55年に県立紀北養護学校岩出療育園教室が開校され、56年に新築されました。

その後、桃山療護園が満床になり、将来はもう一つ老人に特化した施設や障害のある方々のための作業所が必要になると考えられた谷本先生は建設の計画をたてましたが、昭和57年12月11日の夜、突然心筋梗塞のためこの世を去りました。昭和43年の岩出整肢園の開園から数えてわずか13年のうちに5つの施設を建設、乳幼児、児童、成人、あらゆる年代の利用者とその家族、職員たちと亡くなる前日まで共に過ごした人生でした。

その後、谷本千鶴先生を陰から支え続けていた夫の谷本紀次郎先生がその遺志を引き継ぎ、和歌山つくし会理事長、そして桃山療護園園長になりました。

その後、理事長職は湯口美智先生、井上彬先生、川口吉雄先生、中谷博昭先生と引き継がれ、和歌山つくし会は新たな発展の時を迎えることになりました。

桃山療護園での思い出

社会福祉法人　和歌山つくし会　本部事務局次長

和田　万智子

平成15年４月、桃山療護園へ保育士として勤務させていただく事になりました。

保育の現場を離れて10年そして、障がい者施設は学生時代の実習以来でしたので、新しい職場、新しい出会に意気揚々というよりは、不安で一杯のスタートでした。

桃山療護園の周辺は緑に囲まれた、とても自然豊かな環境です。4月は桜が咲き始め、あたたかな春風と、木々が力強く芽吹く活力あふれる景色に、これから新しい世界に挑戦する勇気をもらったように思いました。

建物は2階建てで、私は2階の女性フロアーの配置になりました。

女性フロアーの入所者の方々は明るく、気の合った人同士で楽しくおしゃべりして過ごされていました。新職員の私に興味を持っていただき、色々質問された事を覚えています。また業務内容や、入所者の方個々に対応させていただく支援の内容など、先輩職員からは勿論ですが、入所者の方から教えていただく事も沢山ありました。

「桃山療護園での思い出」となると一番に思い出すのが、「散歩」です。

活動の時間があり、天気が良い日は入所者の方とよく散歩に出かけました。施設周辺の自然を楽しみ、草花を摘み近所の方と入所者の方も交え一緒に雑談したりと、本当にゆったりとした時間を過ごしました。入所者の方に施設周辺の情報などを教わる事もよくありました。退職された職員の方の家の前を通った時には、利用者の方と元職員の方との昔話に花が咲き、お土産にミカンを頂いた事を思い出します。地域に溶け込み、地域の中にある施設なんだなと思いました。

そして思い出すのは、高校野球が始まると毎日携帯ラジオで、実況中継を聞いていた入所者の方。高校野球が大好きと言うだけあり情報も豊富で、出場校、選手や監督の情報をとても詳しく教えていただきました。私もしっかり影響を受けて今では毎年、春・夏の高校野球の始まりを楽しみに待つ大の「高校野球ファン」となりました。

また、紀の川市が主催の「文化祭」の見学に利用者の方と一緒に参加させていただきました。利用者の方々が熱心に、毎日少しずつコツコツと取り組んだ「さおり織」や「組みひも」の「力作」の展示を一緒に見ました。自分たちの作品を見つけると「お～～！」と指をさして驚き、皆さん満面の笑みで作品を見て喜んでいた姿を思い出します。

翌年6月に私は、桃山療護園での新しい出会いと経験、楽しい思い出を宝物に、岩出療育園へ異動となりました。現在、私は保育士から事務職に変わりました。事務業務に追われ忙しい時などは、桃山療護園で利用者の方とゆったりと過ごした楽しかった事を思い出し一息つきます。そして今でも、桃の香り漂う季節や、桜の季節に桃山周辺を通り掛かった時には当時の事を懐かしく思い出します。

③ 社会福祉法人和歌山つくし会の歴史　現代に向かって

和歌山つくし医療・福祉センター誕生まで

昭和43年、岩出整肢園として開園した第1病棟は、昭和55年、第2病棟増築時に大規模修繕しましたが、建物の老朽化に加え、入所児の高年齢化により、居室面積が基準内に収まらなくなり、50人の定員のうち、10人を第2病棟に移す等の対策を講じてきましたが、様々なところに支障をきたすようになり、平成9年、井上隆司園長、増田俶爽事務長の時代に、岩出療育園全面建て替えに向って動き出しました。
当初は、具体的な計画の前に、南海地震に備えての耐震化のための補助金を獲得できないかと、増田事務長が県との協議を繰り返していましたが、諸般の事情により、実現することが出来ませんでした。

平成10年、増田事務長が退職し、その後任に森下宣明事務長が就任し、県からの要望もあり、地域支援の一環として、閉室した紀北養護学校岩出分教室の建物を県教育委員会からお借りして、重症心身障害児（者）通園事業Ｂ型｛岩出通園｝を開始するとともに、第2病棟を改築し、ショートステイ専用床（4床）を確保した。「岩出通園」の名称は、当初は仮称とし、後日、役職員に募り、もっと斬新な名称にする予定でしたが、手続きがスムーズに進み過ぎて、そのまま「岩出通園」になってしまいました。

その間も、病棟床下の水道管に亀裂が入り全面的にやり直したり、台風の暴風で食堂の窓が破られたりと、全面建て替えは一刻の猶予も許されない状況となってきました。

平成14年、松本比呂志事務長が就任し、改めて全面建て替えの補助金確保に動き出しました。本来ならば、岩出療育園は日本自転車振興会の補助金等により建設したので、今回の建て替えも日本自転車振興会の補助金を申請する予定でしたが、当時の日本自転車振興会の補助基準では建て替えが困難であると判断し、増田事務長の時代に模索した耐震化の補助金を申請することにしました。そして、幾多の紆余曲折を経て、中谷博昭前理事長（当時：本部事務局長）や藤井民子評議員選任解任委員（当時：指導員）等の働きにより、念願の補助金確保の目途が立ち、全面建て替え計画がスタートしました。

一方、桃山療護園は昭和51年開園以来、地域の開業医の先生方に支えられてはいたものの、慢性的な医師不足に悩まされていました。岩出療育園が全面建て替えをすることになり、桃山療護園の今後について検討する中で、奥純子園長（当時）や林龍太郎事務長（当時）は、地元での建て替えを模索しましたが、医師不足を抜本的に解消するためには、この際、岩出療育園と合併することが最善の策であるという結論になりました。

法人将来構想委員会は、これらの議論を踏まえて、急遽、岩出療育園全面建て替え計画を桃山療護園と合併しての全面建て替え計画に変更することになりました。
平成17年11月に始まり、平成19年12月までの2年余りの工期をかけ、建物は完成し、大掛かりな引っ越しも無事終わり、平成20年4月、「和歌山つくし医療・福祉センター」として新たな歴史を刻むことになりました。

「思い出」
社会福祉法人　和歌山つくし会評議員
（元つくし医療・福祉センター療育部長）
木村　晴美

和歌山つくし会でお世話になってからの25年を少し振り返ってみました。
平成13年、前身の岩出療育園に桃山療護園が移転統合する7年前のこと。私は、岩出療育園第2病棟に配属されました。

「靴下ないんよ、ないんよ～」と、日課のように、衣類を探し、丁寧に畳んで持ち歩く方。子どものころ、母と一緒に洗濯物を畳んでいたとのこと。

「痛いか？痛いんか？」と、私の指先の絆創膏を見て、心配してくれた方。心が癒される毎日でした。利用者さん1人ひとりに、いくつもの思い出が浮かびます。日課のように散歩に出かけ、年に1回白浜等の宿泊旅行や全員参加で運動会も開催されました。

平成17年自立支援法、平成24年総合支援法が制定され、措置から契約の時代になりました。利用者さんが主体的に、住むところ、暮らし方を自分で選ぶ時代。目まぐるしい変化でした。今では当たり前の話ですが、そのころは、家族のような、わが子のような存在であったので、職員も、家族さんも切換えが難しかったのではないでしょうか。

平成20年につくし医療福祉センターと名称変更したころは職員数が非常に少なく、統合後は利用者さんが落ち着いてから、ショートステイを稼働しました。私はちょうどショートステイの窓口担当でした。ある相談員さんより緊急でショートステイを受けてほしいとの依頼。行政の支援も拒み、2人の子を育てていた母が、緊急入院となった、と。今は故月野先生に相談し会議を開きました。何とか現場の協力もありショートステイへ。その方はその後入所となったのですが、そのような方が他にもおられました。また、家族と直接話す機会が増え、あの時「この子よりも1日長生きしたい」と言った母の覚悟というか責任の強さを感じたのを、今もなお強く覚えています。

今では福祉のサービスが充実し、25年前にはなかった社会資源が身近にたくさん取り巻いています。しかし、その中でつくしの役割は、重症心身障害児者にとって最後の砦であること。何ができるか、できる方法は、何かと考えてみる。故谷本千鶴先生の志を忘れないことが大切だと思っています。つくし会の益々の発展と、皆様のご多幸、ご健康をお祈りしております。

④ 第2種社会福祉事業 里親支援センターへの道のり

社会福祉法人　和歌山つくし会
副理事長　森下　宣明

平成22年3月、和歌山県が実施した「ふるさと雇用再生特別基金活動事業」のプロポーザル里親支援センター「なでしこ」として応募しようと思ったのは何故だったのか、記憶を少しずつ辿ってみたいと思います。

当時、アメリカやオーストラリアでは既に多くのこどもたちが里親家庭で養育されていましたが、それに比べると日本で里親家庭に措置されていたこどもたちは、まだわずかでした。

私たち夫婦もその前年に1歳のこどもを委託されたほやほやの里親で、「困った時に相談できる所があれば良いのに」と思っていたこともあり、当時の子ども未来課の担当者の先見性と、全国里親会の副会長をされていた元会長の熱意にほだされたことから、プロポーザルに応募することとしました。

プロポーザルに応募するためには準備が必要です。基本コンセプトは、新規に職員を雇用するということでしたので、里親支援センターの業務の中心となる人材として、社会福祉士の資格を取得した元乳児院の職員にあたってみたところ、快く引き受けてくれました。

次に、この事業の必要性をプロポーザルの審査員に訴える資料の作成に取り掛かりました。これには、里親会元会長に随分助けられました。

こうして、万全の体制でプロポーザルに臨み、無事、選定されることができました。

しかし、そこからが大変でした。

当時は、里親会事務局も児童相談所が担っていて、里親支援センター「なでしこ」ができたからといって、里親の名簿を頂けるわけでもなく、どこに里親がいるかわからない状態でした。 そこで、再びお世話になったのは里親会元会長でした。里親の集まりがあるときに声をかけていただいて、まず集まりに参加された里親との関係性の構築に努めました。

そして、1年後には、独自に里親名簿の作成に漕ぎつけました。

「ふるさと雇用再生特別基金活用事業」の補助金は平成21年度から3年間のものでした。

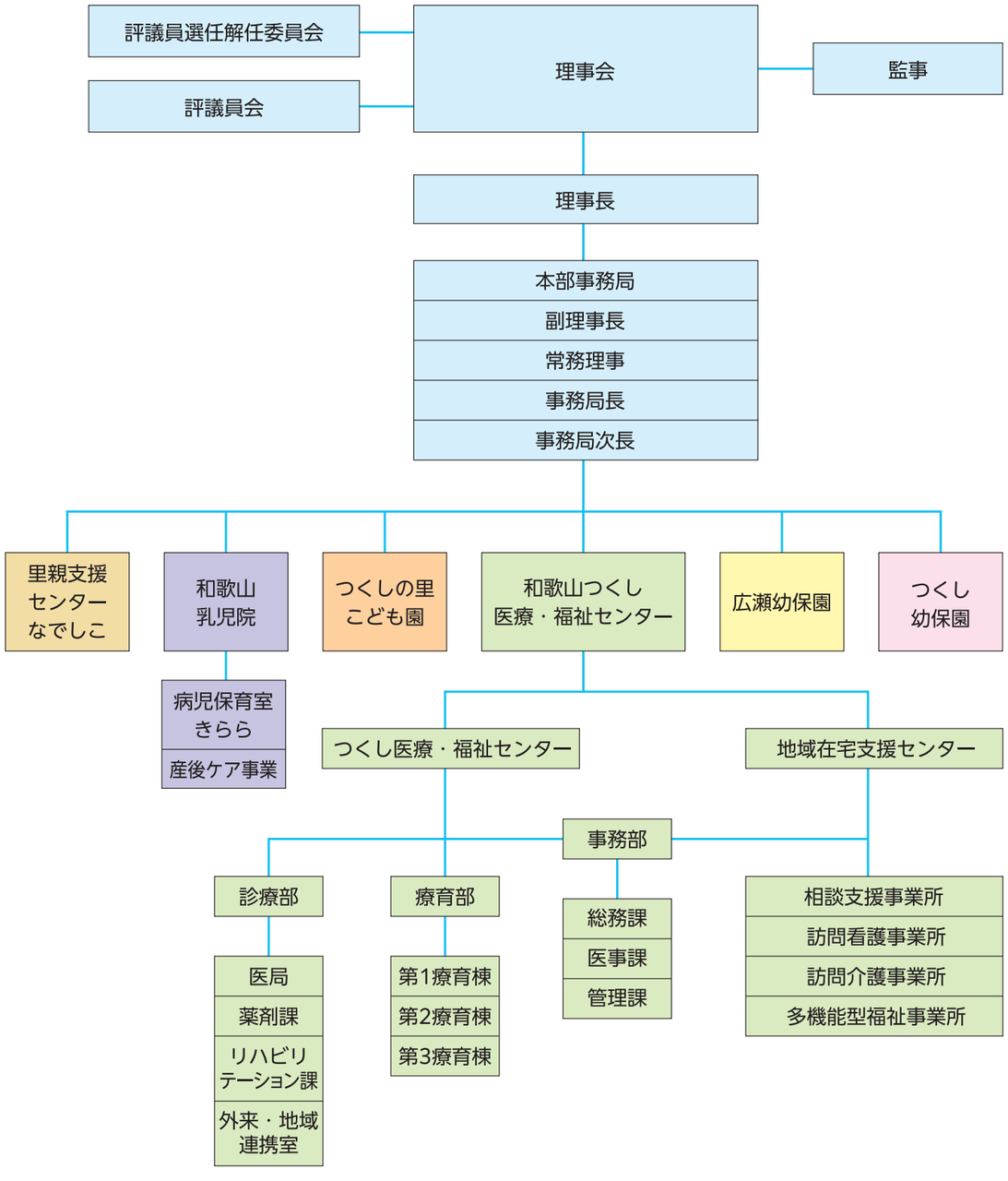
里親支援センター「なでしこ」のプロポーザルはその2年目からでしたので、実質2年で終了しなければならないと思っていましたが、3年目からは国の補助事業である「里親支援機関事業」 に移行することができ、引き続き事業を継続することができました。

平成24年4月、「里親支援機関事業」として、里親支援センター「なでしこ」は、新たな1歩を踏み出しました。その際、児童相談所から里親会事務局の業務も移管され、里親会との関係はより一層深くなりました。

第二章　社会福祉法人 和歌山つくし会組織

Organization

組織図



法人概要

社会福祉法人　和歌山つくし会

事業内容

第一種社会福祉事業	乳児院	障害児入所施設
第二種社会福祉事業	一時預かり事業	障害児通所支援事業
障害者福祉サービス事業	特定相談支援事業	幼保連携型認定こども園
障害児相談支援事業	地域生活支援事業	里親支援事業
訪問看護事業	訪問介護事業	保育所事業

本　部　和歌山県和歌山市吉礼486－1

事務局　和歌山県岩出市中迫665
TEL 0736-69-1772　FAX 0736-69-5251
ホームページ　https://www.wa-tsukushi.or.jp
メールアドレス ga.div@wa-tukusi.jp

代表者　理事長　谷本 美佐子

経営施設

和歌山乳児院
育児サポート事業　病児保育室「きらら」
和歌山県岩出市中迫667-1
TEL 0736-69-1001　FAX 0736-69-1002
ホームページ　https://wakayamanyujiin.com
メールアドレス　tukushi@pac.ocn.ne.jp

つくしの里こども園
地域型認可保育所
和歌山県岩出市中迫667-1
TEL　0736-69-1003　FAX 0736-79-3121
ホームページ　https://www.tsukushi-kodomoen.com
メールアドレス　tsukushinosato@honey.ocn.ne.jp

つくし幼保園
幼保連携型認定こども園
和歌山県和歌山市吉礼486－1
TEL 073-488-7470 FAX073-478-1900
ホームページ　https://www.tsukushiyohoen.com
メールアドレス　tukusiho@pony.ocn.ne.jp

広瀬幼保園
幼保連携型認定こども園
和歌山県和歌山市片岡町1－2
TEL 073-425-7887　FAX 073-425-7897
ホームページ　https://www.hiroseyohoen.com
メールアドレス　hirose19@oak.ocn.ne.jp

和歌山つくし医療・福祉センター
和歌山県岩出市中迫665
TEL 0736-62-4121　FAX 0736-62-8185
ホームページ　https://www.wa-tsukushi.med.jp

つくし医療・福祉センター
医療型障害児入所施設
療養介護事業所
短期日中一時入所事業所

地域在宅支援センター
つくし相談支援事業所
つくしの里訪問看護事業所
つくしの里訪問介護事業所
つくしの里多機能型福祉事業所
- 児童発達支援事業
- 生活介護事業
- 保育所等訪問支援事業

里親支援センター「なでしこ」
和歌山県岩出市川尻115-21
TEL 0736-67-7584　FAX 0736-67-7585
ホームページ　https://www.tsukushi-nadeshiko.com

従業員数　425名（2025年10月1日現在）

役員一覧

歴代役員

初代理事長
谷　本　千　鶴

2代目理事長（4代目）
谷　本　紀次郎

3代目理事長
湯　口　美　智

5代目理事長
井　上　　彬

6代目理事長（会長）
川　口　吉　雄

7代目理事長
中　谷　博　昭

8代目理事長
谷　本　美佐子

歴代理事

谷本	千鶴	湯口	美智	巽	益子	志波	知重子	谷本	紀次郎	井上	禎三	小島	シゲヱ
井上	彬	渋谷	幸代	大村	力雄	中谷	義美	堀	亨	庄司	修	川口	吉雄
中谷	博昭	岡	孝江	仁木	定子	井上	隆司	三口	潤三郎	右藤	和弘	谷本	美佐子
坂口	正志	小林	完	森下	宣明	林	龍太郎	飯塚	忠史	西上	邦雄		

歴代評議員

谷本	美佐子	坂口	正志	松本	比呂志	船津	由起子	櫻井	恵美	井馬	笑美子		
上垣内	加代子	大隈	伸子	井上	靖子	藤井	民子	宮本	健司	和田	節	東	宏
右藤	和弘	田林	芳子	増尾	穣	水城	実	月山	純典	羽畑	嘉代	宇田	和正
御影	伸司	川端	眞理	溝浦	美智子	木村	晴美						

歴代監事

高垣	芳男	中岡	マサ	木本	シズ	川口	三郎	庄司	修	寺本	幸恵	山中	静
竹中	佳子	右藤	和弘	吉村	和	増尾	穣	水城	実	御影	伸司	福田	道雄

歴代評議員選任解任委員

藤井	民子	吉村	和	梅本	修司	立本	治	水城	実	中谷	政紀

2代目、4代目理事長　谷本 紀次郎 氏

谷本千鶴先生は和歌山つくし会を創業して以来、約30年の間に5つの施設を設立されました。夫の谷本紀次郎先生は有名な産婦人科医師で、和歌山市内で医院を営んでいましたが、和歌山つくし会の各々の施設設立時には千鶴先生と共に私財を投じ、現在のつくし医療・福祉センターや旧和歌山乳児院（和歌山市森小手穂）の土地を購入するなど、将来にわたって和歌山つくし会が借金のない経営体制を確立することを目指し、陰ながら協力を続けてきました。現在のように細かく法令が整備されていなかった時代、将来を見通し、こどもたちや障がいのある方々の入所施設に万が一のことがあってはならないという考えからでした。

こどもたちにとても優しく、一途な気持ちで千鶴先生を助け、千鶴先生亡き後はその遺志を引き継ぎ本人も亡くなるまでの間、2代目、4代目の理事長を務めました。

3代目理事長　湯口 美智 氏

湯口美智先生は和歌山つくし会の創設メンバーの一人で、現在の本部の林龍太郎参与の叔母に当たります。1954年の創業から1982年の桃山療護園開園まで、陰になり、日向になり初代理事長を支え、和歌山つくし会の為に尽力されました。

5代目理事等　井上 彬 氏

井上 彬先生はご子息の井上隆司医師（ 岩出療育園園長）と共に「明るく　温かく　安心の」3Aを提唱され、桃山療護園や岩出療育園における日常の療育、リハビリのあり方に苦心し、現在のように法令が詳しく整っていなかった時代、福祉の方向のあり方を研究し、「ノーマライゼーション」の考えのもと、より利用者さん目線での療育、保育を行っていくことを提唱されました。

6代目理事長　川口 吉雄 氏

歯科医師であった川口吉雄氏は平成13年の理事長就任から5期を務められ、和歌山つくし会における一大事業であった岩出療育園と桃山療護園の合併に大きく貢献され、つくし医療・福祉センターがより近代化された施設として出発することにご尽力下さいました。

障害児のための歯科医療を熱心に計画しておられたところ、惜しくも令和2年に逝去されました。

7代目理事長　中谷 博昭 氏

つくし保育所、広瀬保育所が日本でもいち早く幼保連携型認定こども園に移行する際に尽力されました。建築に造詣の深かった中谷氏はつくし医療・福祉センター、つくし幼保園、和歌山乳児院の建設時に各地を巡り、研究し、大村順一設計室と共に機能と美を兼ね備えた建築計画を成し遂げられました。また組織・経営における将来構想など多岐にわたる視点を以て和歌山つくし会の為に尽力されたことは未だ記憶に新しいところであります。

社会福祉法人 和歌山つくし会
社会福祉法人設立 50周年記念式典

和歌山つくし会は1954年に創業され、1966年に財団法人となり、1969年に社会福祉法人として認可されました。2019年11月16日に「岩出市ホテルいとう」において法人設立50年を祝し、盛大に50周年記念式典が催されました。

2019年11月16日
場所　ホテルいとう
司会　テレビ和歌山アナウンサー 佐藤瑞穂

第1部　記念式典（10時30分～正午）

1、 開会の挨拶
2、 和歌山つくし会50年の歩み
3、 感謝状並びに記念品贈呈
4、 永年勤続者表彰
5、 来賓祝辞
6、 来賓紹介
7、 祝電疲労
8、 閉会の挨拶

感謝状

山中会計士事務所代表　山中静
理容つくし会代表 峠 昇
つくし幼保園　元保護者会会長　辻本孝夫
YMCA乳児院ボランティアの会代表　池田幸子
天理教和歌山市教区 那賀支部婦人会支部主任　富松紀子

永年勤続者

鈴木栄子　岡孝江　林龍太郎　森下宣明　平須賀　永岡佐和子　柴田里佳　橋爪靖子　森田美幸　山本惠理子
中澤英美子　溝浦美智子　小西守美子　山下敬子　山本容子　小栗旬子　小西隆照　大西好子　前田典子

祝　辞

和歌山県知事　仁坂吉伸
衆議院議員　石田真敏
和歌山市長　尾花正啓
岩出市長　中芝正幸
公益社団法人　日本重症心身障害福祉協会　児玉和夫
和歌山市保育協議会会長　森田昌伸

来　賓

和歌山県議会議員　北山慎一
岩出市議会議長　田畑昭二
岩出市議会副議長　福山晴美
岩出市議会厚生文教常任委員会委員長　井神慶久
岩出市議会総務建設常任委員会委員長　梅田哲也
和歌山県那賀振興局長　川端眞理
和歌山県病院協会会長　上野雄二
和歌山県認定こども園連絡協議会会長　谷山正紀

第2部　記念講演（13時～14時20分）

50周年記念講演　座長　和歌山つくし医療・福祉センター院長　飯塚忠史
記念講演講師　日野原重明「新老人の会」わかやま会長
和歌山県立医科大学名誉教授・
角谷リハビリテーション病院院長　有田幹雄
演題「人生100年を迎えて」

中谷博昭理事長（当時）
開会の挨拶

社会福祉法人 和歌山つくし会
創業70周年記念式典
（席上揮毫・記念講演）

2024年和歌山つくし会は創業70周年を迎えました。10月26日に和歌山市ホテルアバローム紀の国で多数の関係者の皆様のご臨席を頂き盛大に式典が催されました。

令和6年10月26日（土）
場所　ホテルアバローム紀の国　2階

第1部　記念式典

1、 開会挨拶　　理事長　谷本 美佐子
2、 創業70年の歩み
3、 表彰及び感謝状贈呈（谷本千鶴賞、つくしっこ特別賞、ボランティア他）
4、 来賓祝辞
5、 来賓紹介
6、 祝電披露
7、 受賞者代表謝辞
8、 閉会挨拶　　監事　増尾 穣

（休憩）昼食

第2部　記念席上揮毫・記念講演

1、 席上揮毫
　　揮毫者　金澤 翔子　氏

2、講演　演題「ダウン症の娘と共に生きて」
　　講師　金澤 泰子 氏

社会福祉法人和歌山つくし会　創業70周年記念
第2部　記念席上揮毫・記念講演

記念揮毫　「明るく温かく安心な」　金澤翔子

記念講演　「ダウン症の娘と共に生きて」金澤泰子

プロフィール

金澤 祥子
1985年誕生。東京都出身。5歳から母の師事で書を始める。20歳、銀座書廊で個展。その後、法隆寺、東大寺、薬師寺、延暦寺、中尊寺、建仁寺、熊野大社、厳島神社、三輪明神大神神社、大宰府天満宮、伊勢神宮、春日大社等で個展・奉納揮毫。福岡県立美術館、愛媛県立美術館等で個展、ニューヨーク、チェコ、シンガポール、ドバイ、ロシア等で個展を開催する。
NHK大河ドラマ「平清盛」揮毫。国体の開会式や天皇の御製を揮毫。紺綬褒章受章。
日本福祉大学客員准教授。文部科学省スペシャルサポート大使。
東京2020公式アートポスター制作

金澤 泰子
1943年　誕生、1966年　明治大学卒業、1977年　書家・柳田泰雲に師事、1985年 翔子誕生、1990年 東京に書道教室開設、1998年 書家・柳田泰山に師事。
著書に「愛にはじまる」（ビジネス社）、「天使の正体」「天使がこの世に降り立てば」（まくら春秋社）、「翔子・その書」（大和書房）、「翔子」（角川マガジンズ）、「涙の般若心経」（世界文化社）、「心は天につながっている」（PHP）、「金澤翔子」（平凡社）など。
現在、久が原書道教室主宰。東京芸術大学評議員。日本福祉大学客員教授。

創業70周年記念式典　ギャラリー

第２回　「谷本千鶴賞」・「つくしっ子特別賞」授賞式

和歌山県知事代理　共生社会推進部長　島本 由美氏

衆議院議員　石田 真敏氏

岩出市長　中芝 正幸氏

和歌山市長　尾花 正啓氏

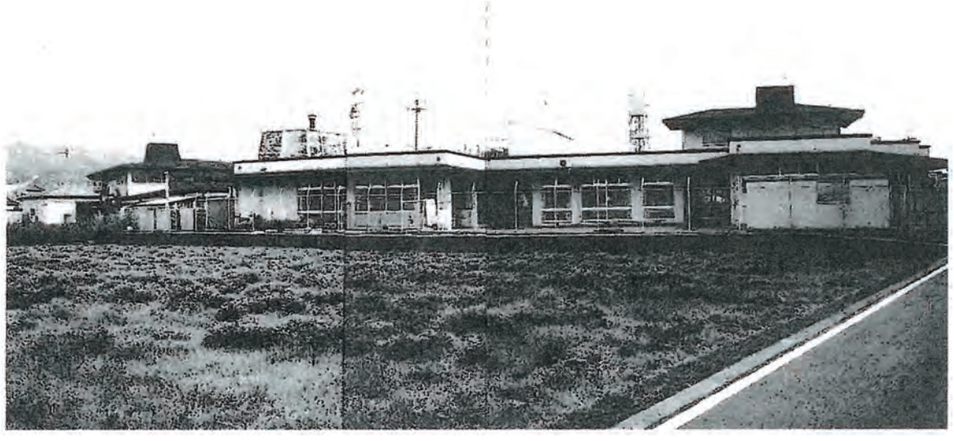
岩出市議会議長　田中 宏幸氏

和歌山市議会議長　丹羽 直子氏

和歌山つくし会　元監事　増尾 穣氏

法人沿革

1954年（昭和29年）	10月	和歌山市内に於いて私設保育所を開所
1956年（昭和31年）	10月 1日	和歌山市片岡町1丁目2番地に和歌山市立乳児院が開院する（定員30名）
1957年（昭和32年）	4月 1日	和歌山市立乳児院の運営委託を受ける
1958年（昭和33年）	11月 1日	乳児院入所定員40名となる
1966年（昭和41年）	3月 1日	財団法人和歌山つくし会設立認可
	3月 5日	財団法人和歌山つくし会の設立が許可される
	4月 1日	和歌山市立乳児院が財団法人和歌山つくし会に運営委託される（定員40名）
1968年（昭和43年）	6月18日	岩出整肢園新築
	8月 1日	乳幼児肢体不自由児施設として岩出整肢園開園（定員50名）
1969年（昭和44年）	11月22日	社会福祉法人和歌山つくし会設立認可
	12月25日	財団法人和歌山つくし会解散
		社会福祉法人和歌山つくし会設立登記
1970年（昭和45年）	2月16日	岩出整肢園、病院開設許可（定床50床）
	7月 1日	岩出整肢園を重症心身障害児施設に変更（定員50名、定床50床）



岩出整肢園

1971年（昭和46年）	9月 6日	皇太子殿下、美智子妃殿下　岩出整肢園行啓

1973年（昭和48年）	8月 1日	和歌山市森小手穂2番地１に和歌山乳児院開院（和歌山市立乳児院廃院） 岩出整肢園を岩出療育園に名称変更

1974年（昭和49年）	5月 1日	和歌山乳児院2階につくし保育所開所
1975年（昭和50年）	5月31日	つくし保育所廃所
	6月 1日	和歌山市立広瀬保育所運営委託を受ける（定員60名）

1976年（昭和51年）	4月　1日	和歌山乳児院2階につくし保育所開所（定員30名） 3歳未満児22名、3歳以上軽度の障害児8名
	7月　1日	重症心身障害児施設桃山療護園開園（定員50名）
1980年（昭和55年）	6月　1日	重症心身障害児施設岩出療育園の拡充（定員80名）
1981年（昭和56年）	4月　1日	県立紀北養護学校岩出分教室開校
1982年（昭和57年）	12月11日	つくし会創始者谷本千鶴氏死去
2000年（平成12年）	6月　1日	岩出療育園第2病棟、ショートステイ専用床（定員4名）増築
2001年（平成13年）	2月26日	つくし保育所学童保育棟新築 （和歌山市の少子化対策福祉事業補助金）
	4月　1日	広瀬保育所新築（定員120名） 岩出療育園、桃山療護園で知的障害児・知的障害者の短期入所事業開始
2005年（平成17年）	4月　1日	障害児デイサービス事業「ももやま」開設
2006年（平成18年）	4月　1日	つくし保育所一時保育事業開始
2007年（平成19年）	12月	岩出療育園全面改築工事完成 ショートステイ専用室（12室）
2008年（平成20年）	1月	桃山療護園が岩出療育園へ移転統合 （定員130名・定床130名）
	4月　1日	「和歌山つくし医療・福祉センター」に名称変更 （定員132名　定床132床）
	10月　1日	つくし医療・福祉センター定員増員　定床増床 （定員136名　定床136床）
2010年（平成22年）	4月　1日	認定こども園幼保連携型「つくし幼保園」開園 （定員100名）集いの広場事業「にこにこ広場」開始
2012年（平成24年）	4月	法改正により重症心身障害児（者）施設つくし医療・福祉センターが医療型障害児入所施設と療養介護施設となる（定員136名・定床136名） つくし幼保園定員変更（定員120名）
	4月　1日	事業所内保育所「つくしの里保育園」開設（定員10名） 法改正により重症心身障害児（者）通園施設事業B型「岩出通園」が以下の事業となる。 福祉型児童発達支援事業「つくしの里」 放課後デイサービス・生活介護事業「つくしの里」となる 相談支援事業　「つくし」開設 事業所内保育所「つくしの里こども園」開園（定員19名） 里親支援センター「なでしこ」が里親支援機関事業となる

2012年（平成24年）	4月	和歌山乳児院が岩出市中迫667－1に新築移転する
2012年（平成24年）	10月	訪問看護ステーション「つくしの里」開設 訪問介護ステーション「つくしの里」開設
2013年（平成25年）	4月	岩出市の補助により、病後児保育事業「きらら」開始（定員3名）
2014年（平成26年）	3月31日	つくし幼保園乳児室増築
	4月　1日	広瀬保育所　定員変更（定員130名）
2015年（平成27年）	4月 1日	認定子ども園幼保連携型つくし幼保園認可（定員130名） 事業所内保育所「つくしの里こども園」が認可型事業所内保育A型「つくしの里こども園」（定員19名）になる
2016年（平成28年）	3月31日	幼保連携型認定こども園広瀬幼保園認可（定員135名）
	4月　1日	幼保連携型認定こども園広瀬幼保園（定員135名）運営開始 幼保連携型認定こども園つくし幼保園定員変更（135名） つくしの里こども園定員変更　（定員30名）
2017年（平成29年）	4月　1日	幼保連携型認定こども園つくし幼保園　定員変更135名
	6月　1日	居宅介護支援ステーション「つくしの里」開設
	11月	和歌山つくし・医療福祉センター増築工事完成
2018年（平成30年）	2月　1日	デイサービスセンター「つくしの里」（地域密着型通所介護・地域密着型介護予防・日常生活支援総合事業指定事業　開設（定員10名）
2019年（令和元年）	11月	社会福祉法人和歌山つくし会創設50周年記念式典
2023年（令和5年）	7月20日	和歌山乳児院バンビーニ広場つくしホール完成 里親支援センター「なでしこ」がつくしホール内に事務所を備える
2024年（令和6年）	4月　1日	里親支援センター「なでしこ」が第2種社会福祉事業となる
	10月26日	和歌山つくし会創業70周年記念式典開催
2025年（令和7年）	10月30日	初代理事長谷本千鶴の肖像画完成 つくし医療・福祉センター「光のホール」で除幕式が行われる

和歌山乳児院

「感謝70年！歴史を胸に希望あふれる和歌山乳児院」

院長　小浦　由加里

施設概要

名　　称	和歌山乳児院
所 在 地	和歌山県岩出市中迫667-1
設置主体	社会福祉法人　和歌山つくし会
定　　員	40名
規　　模	敷地面積　4061.11㎡ / 延床面積　2127.89㎡
構　　造	鉄筋コンクリート造2階建
施設概要	1階　寝室・居間・浴室・食堂/ほふく室・沐浴室/診察室・病室/観察室/子育て支援室/食堂/調理室・食品庫・更衣室/事務室
	2階　病児保育室/心理相談室/相談室/親子生活訓練室（産後ケア室）/地域交流室/ボランティア室/職員食堂/更衣室・リネン室/書庫

施設の歩み

（1）沿革

①昭和31年～昭和48年7月31日
　和歌山市立乳児院（定員30名）
②昭和48年8月1日～平成24年4月10日
　社会福祉法人和歌山つくし会　和歌山乳児院（定員40名）
　和歌山市森小手穂2番地1
③平成24年4月11日～現在に至る
　岩出市中迫667-1
④平成25年から
　乳児院内で病後児保育事業「きらら」開始
　令和6年11月から
　病児保育事業「きらら」に変更し事業を継続
⑤令和5年4月から
　産後ケア事業「デイ型」を開始　名称「エール」
　産後ケア事業令和6年6月から
　「宿泊型」を開始

現状と未来

私は令和5年に院長の拝命を受け、つくし医療・福祉センターから異動してきました。まだ、3年も経っていませんが乳児院の状況が大きく揺らぎ、岐路に立っていると感じています。社会的養育推進計画により施設養育から家庭養育優先の考えが強くなり、里親委託や家庭引き取り等、措置変更も多くなっています。乳児院でも令和6年の初めごろは、こどもの措置数が20人台と少なく、施設でお預かりするこどもの数が減っていくのだと感じていました。しかし、虐待件数が一向に減らない実状もあり、今年度の乳児院の暫定定員は31名ですが満床が続いています。里親委託や児童養護施設への措置変更があって空床ができてもすぐに違うこどもが一時保護されてくる状況です。

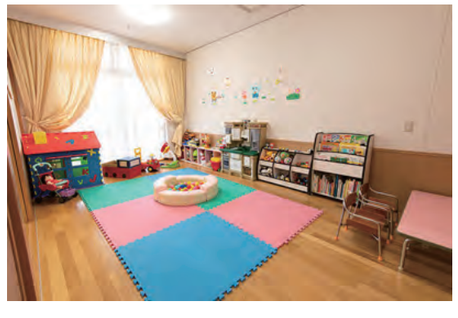
また、以前はこどもの年齢が2歳までには措置変更をすることが多いと聞かされてきました。しかし最近では、0歳から年長までのこどもが入所しており、乳児院から幼稚園や児童発達支援センターへ通う児もいます。特に発達障害をもつこどもたちの行き場がなく、乳児院で就学前まで生活をして6歳で措置変更をするなど乳児院の在り方にも大きな変化が生じています。

社会的養育推進計画の後期では令和11年までに和歌山県の里親委託率を44.1％にしたいと動いているようですが、実際には令和7年度里親委託率は21.5％、和歌山乳児院では里親委託０件と理想と現実のギャップが大きいように感じています。

乳児院では、虐待防止のために地域の子育て支援事業も精力的に行っていかなければならないと「産後ケア事業」「病後児保育事業→病児保育事業」等にも取り組んでいます。

これからも乳児院は、こどもたちやその家族が地域で幸せに暮らしていけるように培ってきた専門性をさらに高め、多岐にわたる支援を提供していくことが期待されています。

そのため、私たち職員は今後も力を合わせて精進してまいりたいと思っています。



事業所内保育所　つくしの里こども園

園長　**石倉　芳美**

施設概要

名　　称	事業所内保育所つくしの里こども園
所 在 地	和歌山県岩出市中迫667-1
設置主体	社会福祉法人　和歌山つくし会
定　　員	30名
規　　模	床面積：211.58㎡ / 園庭面積：466.61㎡
保育事業	休日保育、延長保育、一時預かり保育、園庭開放
職　　員	園長、主任保育士、保育士
めざす子ども像	明るくのびのびと活動する子ども 思いやりのある心のやさしい子ども いろいろなことに興味を持ち挑戦する子ども

施設の歩み

○平成24年（2012年）４月

「和歌山乳児院」の新築移転とともに、事業所内託児所「つくしの里保育園」として利用定員10名で併設開園

○平成27年（2015年）４月

「子ども・子育て支援新制度」の施行により、待機児童の解消や地域の子育て支援機能の維持・確保を図るため岩出市の認可を受け、職員の子どもたちと地域の子どもたちの受け入れを開始
地域型保育事業・事業所内保育所「つくしの里こども園」として０歳児から２歳児まで利用定員19名で開設

○平成28年（2016年）４月
利用定員30名に増員
休日保育・延長保育・一時預かり保育事業を開始

現状と未来

つくしの里こども園は、平成24年に開園し、平成27年に認可施設に移行した、まだ歴史の浅い保育施設です。

定員30名で、３歳児未満の、和歌山つくし会職員と地域のお子様をお預かりし、就労と子育てを両立できる支援を行っています。

開園当初は、あまり知られていませんでしたが、一年一年地域の方々にも名前を憶えていただけるようになり、定員いっぱいの状態で現在に至っております。

こども園の特徴として、月曜日から金曜日までは一般の保育所と同じですが、土曜日、日曜日も平日と変わらず開園しており保護者の方々のニーズに合った形で保育を実施しています。

卒園後は、転園という形で、保護者の希望する幼稚園や認定こども園、保育所等に進級することができます。岩出市立上岩出保育所は受け皿としての連携施設になっています。

園庭は転んでも衝撃の少ない人工芝とゴムチップを敷き詰めており、また暑い夏場でも毎日プール遊びを楽しめるオーニング付きのウッドデッキが人気で、大変満足していただいております。

令和7年度よりＩＣＴシステムを導入し、登降園管理やお知らせ一斉配信など保護者との連携強化で情報共有がスムーズになりました。

しかし、卒園アルバム作成だけは、変わらず一枚一枚写真を貼って職員がメッセージを添えています。子どもたちが巣立った後、記憶にはなくても成長を振り返り、家族の絆を深められると思います。

また令和８年度事業として、保育室１部屋増築により、０歳児、１歳児、２歳児それぞれの保育室の分離と、ランチスペース、ノンコンタクトタイムスペース設置を予定しています。今まで以上に発達段階に合わせた保育ができ、子どもたちのペースや食事のリズムを大切にすることができます。

今後は少子化の影響で園児減少に転じると予測されるので、「選ばれる保育施設」となるための魅力づくりに一層取り組んでいかなければなりません。

具体的な例として、園庭開放や地域交流、ＩＣＴ活用での保育の見える化等、子育てを取り巻く環境に目を向け、地域や家庭のニーズに合ったサービスを展開していくと共に、風通しの良い職場づくりを心掛けたいと思っております。

これからも、家庭的な温かい雰囲気の中で、子ども一人ひとりの個性や興味に寄り添った「安心して預けられる第二のおうち」として、「初めての第一歩」をおうちの方と見守りあい、子ども、保護者、職員が共に成長していける園を目指し、これからも日々の保育の充実に努めてまいります。

入園式

春のお散歩

おいもほり

クリスマス

運動会

ハロウィン

幼保連携型認定こども園　広瀬幼保園

園長　**上垣内　康博**

施設概要

所 在 地	和歌山市片岡町１－２
規　　模	敷地面積　1566㎡ / 建物面積　1043,80㎡
園舎構造	鉄骨造　2階建て
定　　員	135名
竣工年月	平成15年4月
職　　員	園長、副園長、主幹保育教諭、保育教諭、栄養士、調理師
保育事業	障害児保育、産休・育休明け保育、延長保育、一時保育

本園は幼稚園・保育所の子どもたちを、同じ地域で育つ就学前の子どもとして捉え、幼稚園・保育所の連携を図り、それぞれが持つ長所を融合・活用して保育及び教育を行う幼保一元化施設です。
本園では、「明るく元気な子ども」「みんなと協力して意欲的に遊べる子ども」「豊かな感性と創造性のある子ども」「思いやりや、やさしさのある心豊かな子ども」「物（生命）を大切にして感謝の気持ちを持つ子ども」の五つを保育目標に掲げ、日々の教育・保育に取り組んでおり、目標の実現に向け、特色ある活動を行っています。

まず、正しい生活習慣を身につけるために「躾の三か条」を大切にした躾指導を行い、心と生活の基盤づくりに努めています。
知育面では、年中・年長児を対象に外部講師による読み書き計算の基礎学習を実施し、学びの土台となる国語力を育成しています。

さらに、心と体を一体として育む体育指導を年少児以上で行い、運動技能の習得と生涯にわたり運動に親しむ力を育てています。

そのほかにも食育や茶道体験も実施しており、これらの取組を通して子どもたち一人ひとりが心豊かに成長できる環境づくりを進めています。

施設の歩み

現在の広瀬幼保園の前身は、昭和31年10月に開設された和歌山市立乳児院であり、まだ戦後の復興もままならず、大きな社会不安の残る中、家族と共に暮らすことの出来ない子どもたちのため、昭和32年４月に和歌山市立乳児院の運営委託を市から受けました。

当時、和歌山市片岡町（現在の広瀬幼保園）において30名の子どもたちを受け入れましたが、当時は栄養失調の赤ちゃんが多く、亡くなるケースもあったので保育士と共に看護師の役割は多大なものであったとのことでした。

昭和48年８月に和歌山つくし会が和歌山市森小手穂に和歌山乳児院を独自で新設したこと、また、増加してきた働く女性の社会進出支援のため、保育所として一層の充実を図ることを目的とし、和歌山乳児院として使われていた建物を広瀬保育所として活用するため、和歌山市の昭和49年度事業において改築されることとなり、昭和50年６月、和歌山市より広瀬保育所の運営委託を受け、開園することとなりました。

その後、和歌山市片岡町近隣の公立保育所を廃園する代わりに、就学前まで受け入れられるよう、平成15年４月、和歌山市により広瀬保育所が新築され園児を統合、定員が60名から120名となりました。

また、平成28年４月からは幼稚園部を新たに設け、幼保連携型認定こども園　広瀬幼保園として認可を受け運営を開始、定員135名となり、現在に至ります。

現状と未来

本園は和歌山市の中心部、官公庁街に隣接する利便性の高い場所に位置しながら、すぐ傍には和歌山城や公園が広がり、豊かな自然にも恵まれています。園児たちは季節の移ろいを感じながら散歩に出かけ、草花や虫、風の匂いに触れ、日々の生活の中で多くの“本物の体験”を積み重ねています。

さて、近年は共働き家庭の増加に加え、家庭の形や働き方も多様化するなど社会構造の大きな変化を背景に、子育て支援のニーズは年々高まっており、こども園をはじめとする教育・保育施設は地域の重要なインフラとしての役割が求められています。

そのような状況の中で、本園が目指す姿は、「子どもを育てる拠点」としての役割をさらに強めていくことと考えます。こども園は単に子どもを預かる場所ではなく、家庭や地域とつながり、子育てを支える“ハブ”である必要があります。

加えて、子どもたちの育ちを支える保育者が、安心して働き続けられる環境づくりを進めていかなければならないと考えます。働きやすさとやりがいの両立、園内のコミュニケーションの活性化など、保育者が誇りを持って働ける園であることが、子どもたちの笑顔につながると考えます。

これからも本園は、子どもたち一人ひとりの育ちを大切にしながら、家庭や地域とともに歩む園であり続けたいと願っています。変化の大きい時代だからこそ、子どもたちが未来を生きる力を育む拠点として、職員一同、日々の保育に精一杯取り組んでまいります。

幼保連携型認定こども園　つくし幼保園

園長　佐伯　正季

施設概要

和歌山市の東部郊外に位置するつくし幼保園は、側に和田川が流れ三方を山に囲まれたのどかな自然に恵まれた環境の中にあり、０歳から就学前の子どもの教育・保育を行っています。

つくし幼保園の理念

◎「明るく、温かく、安心できる環境の中で、子ども一人ひとりの心の安定を図るとともに基礎体力を身につけ、互いに助け合い共に育っていける心の優しさと、頑張りのきく強い心を持った子どもに育成する」

◎「地域の育児支援に取り組む」

所 在 地	和歌山市吉礼486 - 1
規　　模	4,463.22㎡　　建物敷地：3,330.22㎡
園舎構造	鉄筋コンクリート造瓦葺き２階建　　延床面積：1,368.45㎡
定　　員	135名
職　　員	園長、副園長、主幹保育教諭、事務員、栄養士、調理師
事　業	障害児保育、産休・育休明け保育、延長保育、一時預かり、つどいの（にこにこ）広場

施設の歩み

昭和51(1976)年４月に「つくし保育所」として森小手穂（和歌山県立交通公園東側の当時の和歌山乳児院２階）で開設（定員30名）したのが始まりです。

昭和63(1988)年４月 地域との交流と長時間保育（7：30～18：30）を実施。

平成７(1995)年４月 長時間保育の延長（7：15～19：30）を実施。

平成22(2010)年３月に現在の吉礼に新築移転し、４月に「幼保連携型認定こども園つくし幼保園」として開園しました。開園時は定員100名で始めましたが、現在の定員は135名です。

現状と未来

近年の和歌山市は少子化、核家族化、高齢化などによる人口の減少と出生児数の減少が進んでいます。市街化区域にある当園としては、入園児を確保するために地域で必要とされる園づくりが重要であると考え、全職員が研鑽を積み資質の向上を図り、「つくす」という和歌山つくし会の理念の下、子ども一人ひとりの最善の利益を尊重しつつ、その子にあった将来を見据えた教育・保育を行うとともに、地域のなかで孤立しがちな親子への支援のため、専門性を活かして取組み、地域に根ざした園となれるよう努めています。

子どもたちが安全に毎日わくわくしながら過ごすことができる場、保護者の方々が安心して預けられる場、勤務する職員にとってもやりがいがあって働きやすい場であり続けられるよう取り組んでおります。

つくし幼保園の特徴

①　「日常生活に必要な習慣や態度」の育成

- 基本的な生活習慣や態度を身につけ、見通しをもって生活する力を育みます。
- 集団生活の中で、年齢にあった道徳性と規範意識の芽生えを培います。
- 運動遊びを通して健康的な生活を作り出す心身を鍛えます。
- 茶道体験を通して日本文化への興味や相手を思いやる心を育みます。

②　「学びの基礎力」の育成

- さまざまな環境に関わっていく意欲と課題に集中する力を養います。
- 就学に向け、数量や図形、標識や文字、言葉等への興味・関心を育みます。
- 遊びの中で工夫したり表現したりして柔軟な思考力と表現力を養います。
- 動植物の飼育・栽培を通して生命の不思議さに気づき命を大切にする心を育みます。
- 外国人講師による“英語で遊ぼう”を通して国際社会への好奇心を育みます。

③　家庭・地域等との連携

- 保護者との意見交換を積極的に行い、子育ての意思統一を図ります。
- 懇談や年度末等のアンケートから保護者のニーズを把握し、寄り添った運営に努めます。
- 「延長保育」「預かり保育」「親子触れ合い遊び」「絵本の貸し出し」等、在園児のための支援の他、「一時預かり事業」「にこにこ広場」等、未就園児の育児支援を継続実施します。
- 保育・看護実習生や、中学生の職場体験を積極的に受け入れ、互いの資質向上を図ります。
- 課外教室（習字・ダンス・サッカー・スポーツ）のためや園庭遊具等の施設設備を開放します。

つくし幼保園が実施している育児サポート事業

☆親子つどいの広場「にこにこ広場」

家庭的な雰囲気の場に、未就園児の親とその子どもを迎え、親同士の交流を深めるとともに子育てを楽しくする支援をしています。

☆園庭開放及び育児相談・育児講座

子どもの遊び場や親同士の交流場所の提供、専門講師を招いて勉強会及び育児相談の機会を作っています。

☆つくし広場

在園児親子が集い、保育教諭と一緒に保護者同士の親睦を図るとともに親子の絆を深めるための遊びの会を開催しています。

☆延長保育事業

☆一時預かり事業

おおらかに、つよく、やさしく、愛らしく。

社会福祉法人　和歌山つくし会

幼保連携型認定こども園

つくし幼保園

つくし医療・福祉センター

院長　**鈴木　啓之**

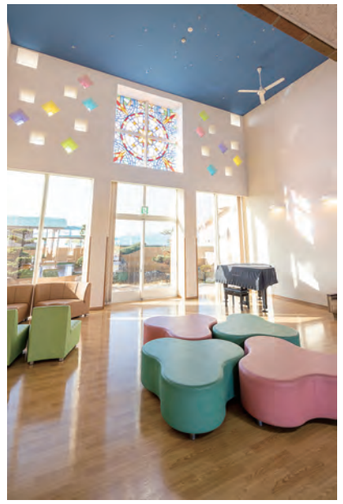
施設概要

所 在 地	和歌山県岩出市中迫665番地		
設置経営主体	社会福祉法人　和歌山つくし会		
定員（床）	136名（136床）／重症心身障害児者136名／ショートステイ12名		
規　　模	敷地面積 13,141㎡／延床面積 10,052㎡（本館 8,766㎡・別館 1,286㎡		
構　　造	鉄筋コンクリート・鉄骨造合金メッキ鋼板ぶき4階建）		
設　　備	本館(*1)　療育棟（食堂談話室、特殊浴槽、天井走行リフト）、給食棟、薬局、診察室、処置室、レントゲン室、エコー室、検査室、事務所、リハビリテーション室（理学、作業、言語聴覚）、心理療法室、食堂、面談室、スヌーズレン、多目的トイレ 別館(*1)　医局、洗濯室		
総事業費	27億7千万円（本館　23億7千万円・別館　4億円）		
主要実施事業等	医療型障害児入所施設・療養介護事業所	外　来	遺伝科・小児科（発達・小児神経）・児童精神・内科・臨床心理・歯科・リハビリテーション科（理学療法・作業療法・言語聴覚療法）
		療育棟	第一療育棟、第二療育棟、第三療育棟
	短期入所事業（日中一時支援事業）利用定員12名		
	地域連携室		

*1　つくし医療・福祉センター分のみを記載

施設の歩み

岩出療育園



昭和43年　8月	乳児院肢体不自由児施設「岩出整肢園」として開園
昭和45年　2月	病院開設許可（定床50床）
昭和45年　7月	重症心身障害児施設に変更（定員50名・定床50床）
昭和48年　8月	「岩出療育園」に名称変更
昭和55年　6月	第二病棟増築（定員80名・定床80床）
昭和56年　4月	県立紀北養護学校訪問部「岩出分教室」開室
平成11年　3月	同　上　　閉室
平成11年10月	重症心身障害児通園事業B型「岩出通園」開所（定員5名）
平成12年　6月	第二病棟ショートステイ専用室（4名）増築
平成15年　4月	知的障害者・障害児短期入所事業開始
平成17年11月	岩出療育園全面改築工事着工
平成18年12月	一期工事完了
平成19年　1月	岩出療育園新建物へ移転 岩出療育園旧建物解体
平成19年12月	岩出療育園全面改築工事完成
平成20年　1月	ショートステイ専用室（12名）

桃山療護園

昭和51年　7月	桃山療護園（定員50名）開園
昭和54年　4月	県立紀北養護学校訪問部「桃山学級」開設
昭和56年　4月	入浴サービス事業開始
昭和58年　3月	県立養護学校訪問部「桃山学級」閉設
平成16年　3月	施設内改修
平成16年　4月	救急避難場所および運動場完成

統　合

平成20年　1月	桃山養護園が岩出療育園へ移転統合（定員130名・定床130床）
平成20年　4月	「和歌山つくし医療・福祉センター」に名称変更（定員132名・定床132床）
平成20年10月	定員増員　定床増床（定員136名・定床136床）
平成24年　4月	法改正により 重症心身障害児（者）施設つくし医療・福祉センターが、 以下の事業に移行となる。 医療型障害児入所施設つくし医療・福祉センター 療養介護施設つくし医療・福祉センター （定員136名・定床136床）
平成30年 7月	施設内改修（リハビリテーション増築）

現状と未来

障がい児・者施設を取り巻く現状と将来への課題

院長　鈴木　啓之

つくしいりょう現状と今後の目指すべき未来像・課題について述べたいと思います。

当センターを含む障がい児・者施設の取り巻く現状

障がい児・者の入所施設において、現在、直面している大きな問題は、入所希望者が急速に減少していることです。実際に、私が和歌山県立医大・小児科に在籍していたわずか6～7年前までは、当センターのみならず和歌山県下の障がい児・者入所施設への入所は、待機期間6か月以上は普通で、年単位の待機時間もよくあり、入所は容易ではありませんでした。しかしながら、ここ数年前から、当センターでは、空床が生じてもなかなか入所の希望者がなく、結果として長期に空床を抱えることが多いのが実情です。その一因は、少子高齢化の進行、在宅医療制度の充実にあると考えられます。支援が必要な人は一定の比率で発生するとされているので、言うまでもなく少子化によって、支援が必要な人の絶対数が減少することになります。一方、訪問看護・訪問介護の充実から在宅医療・在宅介護制度がより普及し、家族の負担を強いてはいるものの、支援が必要な人を自宅や地域で支えられることから、日中一時支援やショートステイを利用して家族の休息の時間を確保しつつ、家族を中心とする支援体制がメジャーとなってきています。もう一つ、センターでは利用者さんが高齢化しつつあり、疾病のために長期間他院に入院加療を受けることも多く、空床率を上げる原因の一つとなっています。

当センターを取り巻く社会的環境の現状は前記の通りではありますが、まず、センターの重要な活動を占めている第1, 2, 3療育棟の現状、リハビリ課および外来部門については現状と将来像を各部の責任者に記載して頂きました。

1. 第1療育棟　（前原淳子課長）

第1療育棟は、入所されている利用者さん42名とショート8名を受け入れている療育棟です。入所者は超重症児10名、準超重症児11名が入所しています。入所者の年齢も7歳から81歳まで幅広く、訪問学校に通っている生徒が3名います。

呼吸器3名、NPPV1名、気管切開12名、胃瘻21名、栄養チューブ2名と医療度の高い入所者中心に看護師と育成（介護福祉士・保育士・指導員）で看護・支援をしています。15年前はここまで医療度の高い入所者はいませんでしたが月日の経過とともに利用者の状況も変化し医療度は高くなり質の高い看護技術、看護支援が求められるようになりました。日々変化していく利用者に安心した日常生活を送って頂くためにも看護師・育成共にケアの質の向上を目指し日々の業務に取り組んでおります。

ショート部門では、日中一時・短期入所も受け入れており療育棟と同様に呼吸器や胃瘻、気管切開と医療度の高い利用者中心に受け入れを行っています。家族様のニーズに対応できるようショート専属看護師が対応をして家族様が安心して利用できるよう努めております。

療育棟スタッフ、ショートスタッフ共に日々忙しく業務をこなしていますが、医療度の高い利用者も経口摂取できる利用者も一緒に楽しめるイベントを計画、開催することで利用者の笑顔を引き出し一緒に楽しめることがスタッフの達成感に繋がっています。

2.　第2療育棟（松田守司課長）

第2療育棟に入所されている利用者さんは、男性が24名、女性が24名の合計48名で、元桃山療護園に入所されていた利用者が多くいます。利用者の年齢は14歳から90歳までと幅広い年齢層の方が利用されており、支援学校に通っている生徒も2名います。

利用者の特徴としては医療的ケアのあまり必要でない利用者と、気管切開が8名、胃瘻が24名、BIPAPによる呼吸管理が必要な利用者が2名居ます。呼吸器を装着されている方が居ないため第1療育棟に比べて医療度は高くありませんが、寝たきりの方、車椅子を自走できる方、独歩可能な方、意思疎通ができない方、理解力はあるが発語のない方、会話が可能で買い物やコンサートを楽しまれている方など様々な方が生活されており、利用者に応じた幅広い支援が求められています。また、療育棟の目標として研修会や勉強会に積極的に参加し自己研鑽をはかり、療育棟で活躍できるよう努めています。

3.　第3療育棟（矢尾美和課長）

常時、医療的ケアのない利用者46名とショート4床の受け入れが可能。利用者は日常生活の支援は全員必要ですが、意思表示ができる方も半数以上居るため支援の内容は、利用者の思いに沿った内容を具体的に計画できる事も多いです。しかし、ショート利用者も含め強度行動障がいや多動、自分で動けるなどの方が多く、見守りを含めた安全な対応も必要となります。3階のショート利用は土・日曜日が多い。3階の各職員の雇用形態は約半数が臨時雇用であり、日勤人数は減り一人の職員が受け持つ利用者の人数が増えていますが、委員会などを含めた話し合いの機会を持ってみんなで協力しあっています。看護師の役割は、健康状態の観察が主で異常の早期発見対応が必要となります。医療的処置がない事が殆どですが、感染や急変など平常でない事が起きた時を想定しながら対応しています。

4.　リハビリテーション課　（川野琢也課長）

リハビリテーション課の現状は、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士がそれぞれの専門性を活かして、入所されている利用者さんと外来患者さんのリハビリテーションを提供しています。医療的ケアを必要とする重症心身障がい児者の方、知的障がいのある方、神経発達症の方など障がい種別は多様で、それぞれの方の発達を促すリハビリテーションを実施しています。外来患者数は理学療法143人、作業療法296人、言語聴覚療法223人です（2025年12月19日現在）。本人だけでなくご家族などの周囲の方々の話しを聞きながら、その方が必要とする支援を医療面と福祉面の両面からサポートしています。年を重ねるとライフステージ毎にニーズも変わり、地域との連携も必要とすることも多いので関係機関と連絡を取りながらおこなっています。

今後の方向性としては①教育（自己研鑽、アウトプット）、②対話、③尊厳を３本柱にしたいと考えています。①教育：医療面だけでなく福祉制度や地域の社会資源などを専門職として研鑽を重ね、視野を広げたり深め続けることが臨床家として必須であると考えています。インプットの研修だけでなく、学会など日々の取り組みや気付きをまとめて学会発表するなどアウトプットする機会も目標にし、さらなる成長につなげたいと考えています。②対話：入所利用者さんや外来患者さんだけでなく、多職種スタッフや地域の方などと対話を重ねることが相手を知る第一歩になると考えています。押しつけや良かれと思ってのリハビリテーションにならないよう対話を通してリハビリテーションをするよう努めたいです。③尊厳：セラピストは他人の身体に触れる特殊な仕事です。利用者さんだけでなくスタッフを含めた全ての人と関わるときは、挨拶や声掛けなど接し方について、相手に尊厳を持つことを忘れないようにしたいと思います。

5.　外来部門（小児科部長：紀平　省悟）

■ 外来部門の歩み

2025年12月現在、外来部門では、神経発達症（発達障がい）の診療を中心に、小児科医（常勤・非常勤）および児童精神科医（非常勤）が診療を担当しています。また、ダウン症や脳性麻痺などの身体障がいについては、小児科医が対応しています。心理検査やカウンセリング、心理療法は心理師4名が担っています。さらに、外来リハビリテーションおよび心理外来の診療前には、非常勤医の応援を得て診察を行っています。

図1　外来（医師）診察件数

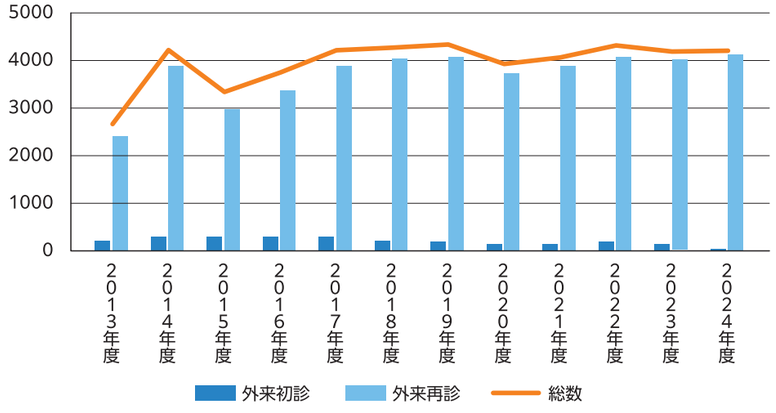
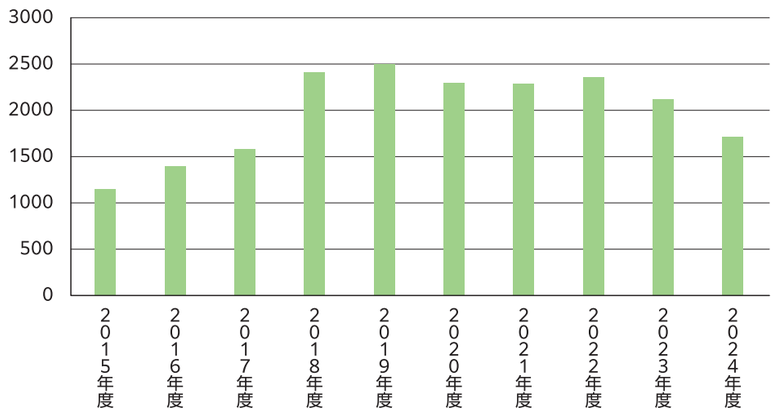


図2　心理外来件数



総合的にみると、診療件数（図1）は2014年度に大きく増加しています。これは、医師の増員と神経発達症児の増加を反映したものです。その後、外来受診総数は年間約4,000件と、ほぼ飽和状態に達しました。心理外来（図2）も心理師数の増減を反映しつつ、2015年度の1,156件から急増し、2019年度には2,516件とピークを迎え、その後は年間2,000件前後で推移しています。

■神経発達症（発達障がい）の激増

神経発達症、とくに自閉スペクトラム症の増加傾向は、全国的にも2000年代初頭から認められており、当センターにおいても、2024年からは初診を制限せざるを得ない状況となりました。

以下の表はやや以前のデータになりますが、筆者（紀平）の外来において、初診後5年以上通院している患者160名（2022年12月現在）の内訳を示したものです。多くは自閉スペクトラム症や知的発達症でしたが、診断名だけでは捉えきれない、さまざまな困りごとや背景を抱えています。

主診断	人数
自閉症スペクトラム症	106
知的発達症（知的障がい）	36
分類困難な神経発達症	6
注意欠如多動症	3
社会的コミュニケーション症	3
反応性愛着症	1
脳性麻痺	1
なし	2
不明	2
合計	160

子どもの育ちは、学校や園、家庭の状況と深く結びついています。成長に伴い、学校生活への不安や不登校が目立つようになり、とくに新型コロナウイルス感染症流行以降、その傾向は強まっています。中には、集中的なトラウマ治療を必要とするケースもありました。さらに、保護者の約4分の1が、支援を要する心の不調を抱えており、筆者の外来では、子どもとは別の診療枠で母親の診療を行ったケースも、少数ながら存在しました。

■外来診療の将来像

図3は、医療人類学者アーサー・クラインマンによる「ヘルスケア・セクター」の概念をヒントに、筆者が「子どものケア・セクター」として再構成したものです。子どもは各セクターを行き来していますが、本来、子どもの育ちは家庭や地域の中で支えられるべきものです。現実には、学校や園、家庭の中に居場所を見いだせない子どもたちが、医療の現場に集まっている状況があるといえるでしょう。障がいは決して特別なものではなく、「神経多様性（ニューロダイバーシティ）」という考え方のもと、一人ひとりの違いを尊重する視点が広がっています。子どもたちが安心して育つことのできる環境を整えることは、社会全体にとっても重要な課題です。こうした視点に立ち、私たちは2015年頃から、狭義の医療の枠を超え、当事者と支援者が同席する「合同診察」や、院内・院外の多職種連携会議において、フィンランドに学んだダイアローグの手法を取り入れてきました。分断されがちな支援や地域資源を、患者と家族を中心に結び直すことが求められているからです。

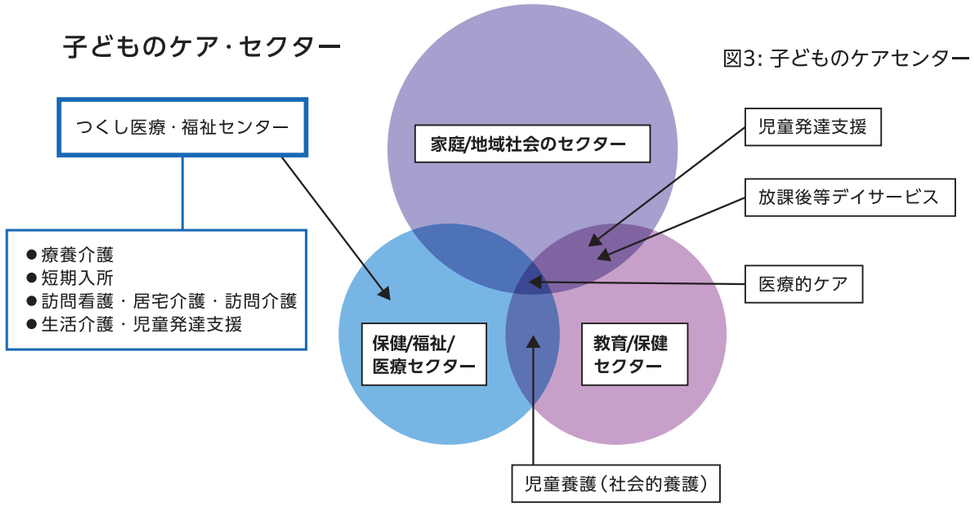


図3: 子どものケアセンター

現状を踏まえてのセンターの将来構想と問題点

1. 利用者さんの定数について

現在、136床の利用者さんの定数をこのまま維持することは困難であると考えています。人口減少、訪問看護、訪問介護の普及による自宅でのケア・支援が中心となってきている中で、今後、入所希望者が減少することは確実に予測されます。入所利用者さんの一人当たりの収入は、ショートステイや訪問看護による収入に比較してかなり大きいので、入所利用者さんの減少はかなりの減収になります。センター組織として、経営的基盤を維持しつつ、利用者減数に対してどう対処するかが喫緊の課題であると認識しています。

2. ショートステイ

在宅でのケア・支援が増加していることから、家族の病気時の対応や休息の意味からレスパイトを含めてショートステイのニーズは増加しています。当センターでも、ショートステイは、第1療育棟に8床（主に医療的ケア必要者)、第3療育棟に4床（医療的ケアのない利用者）の計12床運用しています。第1療育棟のショートステイ利用者さんには、呼吸器をはじめ医療的ケアのレベルの高い人もおり、ケアを担当するスタッフはかなりの負担があります。現在のショートステイベッド稼働率は、十分な数のスタッフではないにもかかわらず、70％前後になっています。ニーズが増加しているショーステイを、利用者さんが減少したベッドを使用すればベッド稼働については人数的な収支が合うことになります。しかしながら、ショートステイは、利用率の変動が大きく安定した収益性が得にくいのが実情です。かといって、スタッフを減らして、ショートステイを維持することは医療的ケアの高いショートステイの方のケアもあり困難です。ショートステイの診療評価が今より高くならない限り、入所利用者数減をショーステイ利用者増のみで賄うのはなかなか難しいのが現状です。

現時点での方向性

医療・福祉センターの将来像は、いくつもの要素が絡んでいて、一直線に解決できる方向性を見出すのは困難な状況です。利用者さんの人数をできるだけ確保しつつ、今後ニーズが高まると予測されるショートステイや訪問看護・訪問介護との連携強化を模索することになると考えています。

「穏やかな日常を守り続けるということ」
～BCPが支える生活の基盤～

つくし医療・福祉センター　療育部長
飯田 康人

私がつくし医療・福祉センターに入職した2011年当時、利用者の皆さんは穏やかな日常を過ごしておられました。現在ほど医療的ケアを必要とされる方は多くありませんでしたが、それぞれの生活リズムを大切にした丁寧な支援が積み重ねられ、生活の場には温もりがありました。季節の行事やご家族との時間も大切にされ、その何気ない日常は、長きにわたりセンターを守り育ててこられた多くの方々の思いと、職員一人ひとりの誠実な実践の上に成り立っているものだと感じています。

その後、医療の進歩や利用者の高齢化に伴い、より高度な医療的ケアを必要とされる方の受け入れが進み、センターの役割は広がってきました。私たちは支援の専門性を高めながら、どのような状況にあっても利用者の穏やかな日常を守ることを大切にしてきました。

2020年、いわゆるコロナ禍は、私たちの支援の在り方に大きな変化をもたらしました。感染対策を徹底しながら、いかにして利用者の生活を守り続けるか。面会や行事の在り方を見直し、日々試行錯誤を重ねる中で、『日常生活の安定こそが、生活の質を支える揺るぎない基盤である』ということに、私たちは改めて気づかされました。

現在、センターでは感染症に備えた感染BCP訓練を実施しています。BCP（事業継続計画）は緊急時にも事業を継続し早期復旧を図るための計画ですが、福祉施設においては単に業務を止めないことが目的ではありません。利用者の命と暮らしを守り、生活の基盤を維持するための実践です。

入所利用者にとってセンターは生活そのものです。医療的ケア、食事、入浴、排泄、日中活動、休息、その一つひとつが生活のリズムを形づくっています。非常時においても可能な限りそのリズムを守る体制を整えること、それが入所施設におけるBCPの本質です。そのため、役割分担の明確化、対応手順の確認、物品の備蓄、実践的な訓練などを積み重ね、医療、看護、療育、生活支援が連携し、平時から検証と改善を続けています。これらの取り組みは非常時への備えであると同時に、日々の支援の質を高める営みでもあります。

また、和歌山県で発生が懸念されている南海トラフ巨大地震を想定した自然災害BCP訓練にも力を注いでいます。医療的ケアを必要とする利用者にとって、電源や医療機器の確保は生命線です。停電時の対応、非常用電源、物資の確保、職員参集体制などを具体化し、全部署で検証を重ねています。災害時であっても尊厳ある生活を継続できるよう、組織一体となって備えを進めています。

さらにセンターは、地域で暮らす重症心身障害児(者)の福祉避難所としての役割も担っています。岩出市および紀の川市と連携し、発災時の受け入れ体制や協力体制の構築を進めています。施設の枠を越え、在宅で生活する重症児(者)の安心を支える存在であり続けることも私たちの重要な使命です。

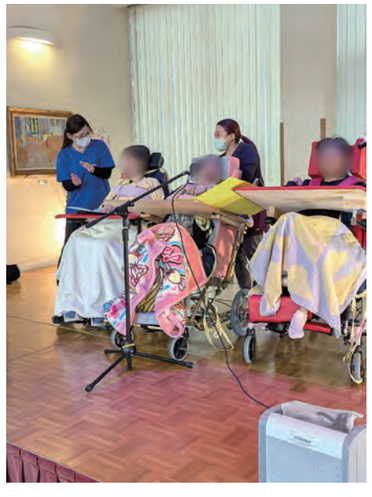
『あかるく　あたたかく　あんしんできる療育を提供する』という理念は、利用者一人ひとりの暮らしに『心をつくす実践』として、これからも変わることのないセンターの原点です。BCPの取り組みもまた、この理念を未来へつなぐ実践にほかなりません。利用者の日常生活の基盤をより強固なものとし、その上に豊かな時間を積み重ねていくこと。それが生活の質の向上につながります。

70年の歩みの先にあるのは、特別な未来ではなく、今日と同じように穏やかな一日が続いていくことだと私たちは考えています。その一日一日を大切に守り、育みながら、これからも地域とともに歩み続けてまいります。

つくし医療・福祉センターイベント

ふれあいコンサート

つくし祭り



クリスマス

リハビリ

たなばた

令和8年4月1日和歌山つくし会　辞令交付式

地域在宅支援センター

センター長　**飯塚　忠史**

施設概要

所 在 地	和歌山県岩出市中迫665番地	
設置経営主体	社会福祉法人　和歌山つくし会	
定員（床）	多機能型福祉事業所　10名（生活介護5名、児童発達支援5名）	
設　　備	本館(*2)	相談支援事業所
	別館(*2)	多機能型福祉事業所、訪問看護ステーション、訪問介護ステーション
主要実施事業等	多機能型福祉事業所(生活介護・児童発達支援・保育所等訪問支援)	
	訪問介護ステーション（居宅介護・重度訪問介護・行動援護）	
	訪問看護ステーション	
	相談支援事業所	

*2　地域在宅支援センター分のみを記載

施設の歩み

岩出療育園

平成11年 10月　重症心身障害児（者）通園事業B型「岩出通園」開始

桃山養護園

平成17年　4月　児童デイサービス「ももやま」開設

統合

平成24年　4月　法改正により重症心身障害児(者)通園事業B型「岩出通園」が、以下の事業に移行になる。

福祉型児童発達支援事業「つくしの里」

放課後等デイサービス「つくしの里」

生活介護事業「つくしの里」

相談支援事業「つくし」開設

平成24年 10月　訪問看護ステーション「つくしの里」開設

訪問介護ステーション「つくしの里」開設

平成25年　4月　「保育所等訪問支援事業所」開設

平成29年　6月　「居宅介護支援ステーションつくしの里」開設

平成30年　2月　「デイサービスセンターつくしの里」開設

平成30年　3月　別館増築工事完了

平成30年　6月　放課後等デイサービス「つくしの里」閉設

現状と未来

地域在宅支援センターの現状と未来

地域在宅支援センター センター長　**飯塚　忠史**

「つくし会は、常に時代のニーズに応えるサービスや施設を提供してきた」

70周年記念祝賀会で和歌山つくし会の歴史が報告された後、参加されたある来賓の方からいただいたお言葉です。第二次世界大戦終戦後の混乱した時代に初代理事長谷本千鶴先生が苦労して立ち上げてから、医療が進歩して医療的ケア児者の増加が社会問題化した現在まで、和歌山つくし会はたくさんの社会的支援をしてきました。

和歌山つくし医療・福祉センターが在宅部門を立ち上げると聞いて私が転勤してきたのは2012年10月で、岩出療育園と桃山療護園が合併新築した2008年から4年が経っていました。2012年度に多機能型福祉事業所(児童発達支援事業・放課後等デイサービス・生活介護事業・保育所等訪問支援：放課後等サービスは2018年閉設)、訪問看護ステーション「つくしの里」、訪問介護ステーション「つくしの里」と相談支援事業所「つくし」が設立されました。そして2021年地域在宅支援センターとしてまとめられました。在宅支援部門は経営収支的には厳しい状況が続きましたが、その後2023年経営見直しが行われ、運営も改善しました。例えば訪問看護や訪問介護の訪問数は2022年度(前)から2024年度(後)の3年間で1.7倍に増加しました。

現在、地域在宅支援センターの課題は、組織の管理と、将来構想策定です。全体でスタッフは増えていますが、一部ではスタッフ不足の職場もあります。利用者の増加もあり、組織を効率よく動かし、より働きやすい職場にしなければなりません。さらに大切なのは将来の社会の見通しを踏まえた構想です。時代のニーズはどこにあり在宅部門はそれにどう応えるのか。組織の規模はどれぐらい必要なのか。将来構想は私たち在宅部門だけでなく、つくし会全体で共有する必要があります。

これからの日本社会はどこへ向かっていくのか、、、誰にも分りません。私たちの従事する障害児福祉のあり方はどう変わるのでしょうか。専門家によると日本社会の少子高齢化はもう、どうにも止まらない様です。これほどまでも出生数が減ると、例え出生数に対する障害児の比率が増えたとしても障害児の実数が減る可能性は十分考えられます。最近のデータによれば医療的ケア児の総数は数年前から頭打ちですが、呼吸器装着児は右肩上がりで増加しています。医療的ケア児者数は減り重症化が進むのでしょう。

一方社会全体を見ると人口減少による労働力不足が進み、障害児の保護者も含め国民みんなが働く様に国は進めています(医ケア児等支援法)。働く家庭の子育ての負担を軽減するために、子育て支援の重要性はこれからますます高まるのは確実です。私たちの事業の強みは、スタッフが子供の疾患や発達に関する知識やケアの実績があること、子育てに困難のある家庭を支えるケアをしていることです。昔はおばあちゃん等がしていた子育て支援の役割を、核家族化した現在、医療や子育ての専門職がすることが求められています。重症心身障害児や医療的ケア児のおられる家庭だけではありません。最近私たちは多胎児・発達障害児等の手のかかる子どもたちや、育児環境が不十分な家庭を支えています。若い夫婦が仕事をしながら、楽しく子育てができるようにならなければ、少子高齢化の流れは改善しないでしょう。そのためつくし会在宅支援部門の仕事はまだまだ広がっていく可能性があると私は考えています。

私たち在宅部門は社会のニーズに合った支援を、心を込めて提供して参ります。

里親支援センター「なでしこ」

センター長　**森下　宣明**

施設概要

名　　称	里親支援センター「なでしこ」
種　　別	第2種社会福祉事業　里親支援センター
認可年月日	令和6年4月1日
活動エリア	和歌山県中央児童相談所管内19市町
職員数	10名
主な業務	①里親制度等普及促進・リクルート業務　⑤里親等委託児童自立支援業務 ②里親研修・トレーニング業務　⑥和歌山県里親会事務局業務 ③里親等委託推進業務　⑦特別養子縁組後の支援業務 ④里親等養育支援業務　⑧里親保険業務
予算規模	65,000千円
住　　所	〒649-6231　岩出市川尻115-21 TEL0736-67-7584　FAX0736-67-7585 E-mail：nadeshiko@shirt.ocn.ne.jp

施設の歩み

平成22年4月　1日	和歌山県ふるさと雇用再生特別基金活用事業のプロポーザルに参加し、2事業者により競合した結果、選定され、つくし保育所跡地で（和歌山乳児院2Ｆ）で、里親支援センター「なでしこ」（以下、「なでしこ」という）を開所する（2年契約）
平成24年4月　1日	「なでしこ」が里親支援機関事業の認可を受ける
平成24年4月11日	和歌山乳児院が「和歌山市森小手穂2-1」から「岩出市中迫667-1」に新築移転したことに伴い、「なでしこ」も移転する
平成24年5月	和歌山県里親会事務局を受託する（「中央児童相談所」から「なでしこ」に変更）
令和2年9月　30日	紀北里親支援連絡会事務局を受託する（中央児童相談所管内の19市町及びその他の団体が参加）
令和5年7月　21日	和歌山乳児院バンビーニ広場・つくしホールが完成したことに伴い、「なでしこ」を現在地に移転する
令和6年4月　　1日	令和4年児童福祉法等の一部を改正する法律が施行されるにあたり、里親支援センターが第2種社会福祉事業として位置づけられ、「なでしこ」も和歌山県の認可を受け、新たにスタートする。

現状と未来

なでしこの現状と未来

なでしこは平成 22 年に発足して以来、「里親支援のことについては何でもやる」ということをコンセプトに活動を行ってきました。令和 6 年 4 月 1 日に第 2 種社会福祉事業：里親支援センターとして認可されてからも、里親支援センターとして定められた業務以外のことも数多く実施しているのが現状です。

その中で特に業務の比重が高いのは和歌山県里親会の事務局業務です。里親さんや委託児との関係を高めるためには重要な業務となるのですが、里親支援センターの業務としての加算の対象にはなっていないのが現状です。

また、特別養子縁組後の支援についても、国は別枠で予算措置をしているのですが、和歌山県は予算措置を講じていないのが現状です。

このように、まだまだ、取り組まなければならない事は多くありますが、今後も、社会的養育の必要なこどもたちを、社会全体で支えていくための一助として里親制度の推進に尽力していきたいと思います。

和歌山乳児院 バンビーニ広場・つくしホールの竣工

社会福祉法人 和歌山つくし会　副理事長　**森下 宣明**

令和5年7月20日、岩出市川尻の地に、和歌山乳児院　バンビーニ広場・つくしホールが完成し、里親支援センター「なでしこ」の事務所として新たな歴史を刻み始めました。

法人にとって、長年の間、懸案だった用地に、令和6年度の児童福祉法改正により、第2種社会福祉事業に位置づけられるまでの間、フォスタリング機関として、一足先に、事業所を構えることになりました。

平成29年8月に発表された「新しい社会的養育ビジョン」に盛り込まれた3歳以下の乳幼児の里親委託率75%の達成に向けて、和歌山県でも社会的養育推進計画を作成し、その実現に向けた「里親委託加速化プラン」にも取り組んでいます。

しかし、こうした机上の空論はさておき、実際に里親をしながら、里親支援センター「なでしこ」を立ち上げ、里親会の事務局を引き受けて、特別養子縁組をされた子どもたちや里親家庭で生活している子どもたちの悩みや葛藤に関わり、出自や生い立ちの整理（ライフストーリーワーク）をしていると、大人の身勝手さに振り回される子どもたちの苦悩が身に沁みます。

自分は何故、実親のもとで育てられなかったのか。

自分は何故、この家に来たのか。

実親はどんな人で、今、どこにいるのか。

会いたい、会いたい、会いたい・・・。

里親支援センター「なでしこ」は、バンビーニ広場、つくしホール、心理相談室を備えていて、これらの子どもたち、里親、ファミリーホームの支援の拠点となります。

ひとりでも多くの社会的養護の必要な子どもたちの心の拠り所となるよう、職員一同、力を合わせて頑張ります。

散歩やウオーキング等、お近くにお越しの際は、是非、お立ち寄りください。バンビーニ広場でのんびりと空を見上げたり、研修会等の会場に「つくしホール」もご活用ください。皆様のお越しをお待ちしております。

つくしホールのエアートランポリンで遊ぶ
つくしの里こども園のこどもたち

ボールプールで遊ぶこどもたち

令和5年7月20日　バンビーニ広場・つくしホール竣工式

つくしホールに
和歌山県警察音楽隊が
やってきました！

令和7年4月1日　和歌山つくし会　辞令交付式

「谷本千鶴賞」・「つくしっ子特別賞」受賞者

和歌山つくし会は2024年に創業70周年を迎えました。昭和、平成、令和と3つの時代を社会福祉事業一筋に歩んで参りました。2024年に創業70周年を記念し、初代理事長の名を冠した「谷本千鶴賞」と「つくしっ子特別賞」が谷本千鶴基金によって創設されました。

谷本千鶴賞は社会福祉法人和歌山つくし会に多大な貢献をした職員又はグループに、「つくしっ子特別賞」は施設によく貢献した職員や、職場で良い雰囲気作りをした職員またはグループに授与されます。

令和5年度　第1回「谷本千鶴賞」・「つくしっ子特別賞」

第1回　谷本千鶴賞

宮井 陽子　和歌山乳児院看護部長

第1回　つくしっ子特別賞

つくし医療・福祉センター 第1・第2・第3療育棟チーム
広瀬幼保園　リーダーズ
つくし幼保園　保育教諭　飯田 孝美
和歌山乳児院　保育士　山本 恵理子　谷口 智香

令和6年度　第2回「谷本千鶴賞」・「つくしっ子特別賞」受賞者

第2回　谷本千鶴賞

小山 有佳乃　理学療法士　つくし医療・福祉センター
訪問看護ステーションチーム　「つくしの里」

第2回　つくしっこ特別賞

つくし医療・福祉センター　生活チーム（つくし学校）グループ10名
第1療育棟　看護師　梶間 眞理　保育士　甲斐 美幸
第2療育棟　看護師　下平 知沙恵　保育士　中林 紗里奈　育成主任　島田 夫美
第3療育棟　保育士　海瀬 麻代　保育士　小坂 優奈
リハビリ　作業療法士　北条 ひかる　作業療法士　西村 美咲　言語聴覚士　阪井 友哉
広瀬幼保園　保育教諭　山内 妙子
つくし幼保園　保育教諭　中澤 英美子
つくしの里こども園　保育士　北端 智加
和歌山乳児院　心理療法士　古谷 有佳理
和歌山乳児院　保育士　鍛治 幸美

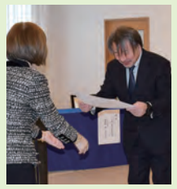
令和7年度　第3回「谷本千鶴賞」・「つくしっ子特別賞」受賞者

第3回　谷本千鶴賞

つくし医療・福祉センター　療育副部長　山下 敬子

第3回　つくしっ子特別賞

つくし医療・福祉センターショートチーム　８名
多機能型福祉事業所「つくしの里」所長　濵田 拓也
里親支援センター「なでしこ」　主任　川口 由佳
和歌山乳児院　家庭支援専門相談チーム
看護師　玉置 あゆみ　保育士　上村 智美
つくし幼保園　保育士　土橋 仁美
広瀬幼保園　夏祭り実行委員チーム　３名
つくしの里こども園　保育士　大江 靜香



初代理事長 肖像画除幕式

2025年10月30日、つくし医療・福祉センターで和歌山つくし会　初代理事長　谷本千鶴先生の肖像画除幕式が執り行われました。1982年の12月11日、過労による突然死の後、43年の月日が経ちましたが、今でも懐かしく思ってくださっている利用者や職員の為に「谷本基金」より肖像画が贈られることになりました。除幕式当日には岩出市長様他、多くの方々が駆けつけて下さり、貴重なお言葉を頂きました。中でもセンターに50年近く入所しておられる前川智子さんが、「千鶴先生、お帰りなさい」と精一杯お話をしてくださいました。つくし医療・福祉センターの光のホールに掲げられた谷本千鶴先生は昔と変わらない優しいまなざしで今も和歌山つくし会の全員を見守っています。つくし幼保園、広瀬幼保園、里親支援センター「なでしこ」にも同様に肖像画が贈られました。

社会福祉法人を取り巻く外部環境はますます複雑化していくことが予想されますが、千鶴先生の提唱された「つくす」こころをこれからも忘れることなく社会福祉の増進のため努力を続けて参りたいと思います。

第四章　つくしジャーナルの発刊

Journal

令和2年9月1日、和歌山つくし会法人内機関誌「つくしジャーナル」が発刊されました。

法人内の5つの施設（現在6つ）は岩出市と和歌山市に所在し、地理的に一般職員の交流や情報交換が難しかったこと、また過去において整理された記録が少なく、法人全体の機関誌がなかったこと、などの理由で、谷本美佐子理事長のアイデイアにより、令和2年の発刊以降毎年2回記事を募集し、刊行しています。

その時々のトピックやニュースをとり上げ、新規職員や昇任職員の抱負、職員へのインタビュー、イベント報告など、毎回、回を追うごとに充実した内容になってきました。

たくさんの職員さんからの投稿や写真が紙面に残り、見ごたえ、読み応えのあるものとなり、また記録としても将来に残していきたい和歌山つくし会の生きた物語りとなっています。話題になった記事をご紹介いたします。（氏名、役職当時）

創刊号

イタリアから新理事長がやってきた！！

つくし医療・福祉センター
院　長　**飯　塚　忠　史**

突然ですが、私たち夫婦の趣味は海外旅行です。４０年前の新婚旅行にインド最南端のコモリン岬（カンニャークマリ）に行ったのを皮切りに、３０年ほど前から毎年のように２人で行っています。５大陸はすべて行きました。北アメリカはサンフランシスコ、ニューヨーク、カナダ。南アメリカはイグアスの滝、天空の都市マチュピチュ。ヨーロッパもいろいろ行き、昨年はクリスマスマーケットを回る旅でした。オーストラリアのウルル（エアーズロック）、アフリカはビクトリアの滝とサファリ。もちろん中国も少し。若いうちは二人でバックパッカーでしたが、最近は荷物を背負うのが大変で団体旅行になりました。

人生のたそがれ時の私たちが、最後にどこに行きたいかと話し合った時に一致するのは、イタリアです。名画「ローマの休日」で、訪問したヨーロッパの中でどの街が最も良かったかと報道陣に聞かれた王女役のオードリィ・ヘップバーンが「やっぱりローマ！」と言ったイタリアです。私たち二人はローマも好きですが、さらに南のナポリが大好きです。あかるく、あたたかい風土。真っ青な海と空の間を船でいくとカプリ島と青の洞窟。電車で行くとベスビオス火山とポンペイの遺跡、バスで海岸沿いのくねった道を行くと真っ青な海がきれいなアマルフィー。岩をくりぬいた住居が並んだ街サッシもあります。

さて、今回発刊されたこの雑誌の名は「つくしジャーナル（Giornale TSUKUSHI）」です。Giornaleはイタリア語だそうです。発刊の目的は和歌山つくし会内部の情報交換を活発にし、風通しを良くすることだそうです。昨年、社会福祉法人和歌山つくし会の理事長に就任された谷本美佐子新理事長の発案です。新理事長はイタリア生活が長かったと聞きます。お会いすると明るく、あたたかい、何かイタリア的な雰囲気があります。私たちのつくし医療・福祉センターは２００８年に岩出療育園（８０床）と、桃山療護園（５０床）が統合（１３６床＋ショートステイ１２床）し、その後在宅部門も充実して、今では職員数は２２０人を超え和歌山県内の社会福祉法人では別格の規模になりました。会社で言えば立派な中企業ですが、急拡大した組織にありがちな課題もあります。これからは力を合わせてより風通しの良い「あんしん」な施設、コンプライアンスを守り、スタッフを大切にする施設にセンターを変えていくことが課題です。和歌山つくし会を更に発展させるため、イタリア的な「あかるく・あたたかい」新理事長のもと、皆で力を合わせませんか。

追伸：「つくし」とは植物の「つくしんぼ」の「すくすく育つ」という意味と共に「尽くす」という言葉から命名されたと聞きました。原点に返って「利用者さんに尽くす」、さらに「社会に尽くす」ことも大切にしたいですね。

第３号

職員投稿　私の仕事への想い

つくし医療・福祉センター　療育部長　**小　浦　由加里**

私は「看護師」という職を選び、かれこれ２０数年になります。今まで看護師という職を変えたこともなく、この仕事が私の天職なのかなと思いながらやってきたような気がします。

もともと、高校を卒業するまで田舎の港町で暮らしていたので、近所付き合いなど人との関りを持つ機会が多く、おばあちゃん子でもあったので、特に高齢者の方との関りが好きでした。

私が看護職を目指したきっかけは、中学生のころ母親が交通事故で入院し、その時に対応してくれた看護師さんに惚れてしまったからです。（よくありがちですよね）この看護師さんに任せておけば、お母さんをきっと元気にしてくれると思わせてくれる人でした。すごく優しく、家族のことも思いやってくれたことを覚えています。高校に入り、人の役に立てる仕事がしたいと思うようになり、看護師を目指しました。そしてあの看護師さん達と一緒に仕事がしたいと思い、母が入院していた病院に就職しました。憧れの人たちと仕事が出来る喜びと期待で胸がいっぱいでした。しかし、あの時は患者の家族という立場でしたが、今回は看護師見習いという立場だったので、看護師さんの私への対応は「月とスッポン」でした。あの優しい看護師さんはどこへ行ったのか？と思うくらいよく注意や指導を受けました。でも、今ではその経験や指導があったからこそ、私の忍耐力に繋がったのではないかと思っています。

その後奈良県の病院や和歌山県立医科大学付属病院で経験を積み、縁あって和歌山つくし医療・福祉センターへお世話になることになりました。それから、もうかれこれ１０年になります。

医療畑でしか仕事をしたことがなかったため、福祉に関しては全くの素人でした。しかし、仕事をしていく中で気が付いたことは、縦割り行政で管轄の違いなどの問題はありますが、支援を受ける利用者側から見ると医療も福祉も関係ないということです。使える医療・福祉サービスはできるだけ使いたいという事です。当センターではそういった人たちが少しでも生きにくさを感じることなく、生活が送れるように支援していく役割を担っています。また、地域の中でともに生きる施設を理念として施設造りを目指しており、私自身もその大きな役割に向かって、微力ながら力を注いでいきたいと思っています。

私は一人の人間として仕事をする上で大切にしていることは「笑顔」「信頼関係」「思いやり」であり、相手の気持ちや痛みに少しでも寄り添える人間でありたいと思い、ここまでやってきました。患者さんや利用者さんだけでなく、私の周囲の職員の方や家族や友達に対してもそうです。全力でし過ぎて空回りすることもありますが、「ケセラセラ」で今までやってきました。でも、これは周囲の人たちの協力があってのことです。一人ではなく、多職種チームが一丸となれば道は開ける。「なんとかなる」そして、やりたいことが少しずつでも実現できていくと信じて、今後も精進していきたいと思っています。

第３号

もふもふ

つくしっ子ニュース！！　其之参　院長先生とわんこ

吾輩は犬である。

吾輩は犬である。名前はパトラ。名前からわかるように吾輩は雌である。しかし、顔が爺（じーじ）顔なので、「吾輩」が似合う。名前の由来はご主人のお母さまが、吾輩が非常に美犬なのに感心してクレオパトラの名前の一部を取って、パトラと名付けた。

吾輩の外見は立派な洋犬である。体重１５kg、足は長く体高は５６㎝、後ろ足で立ち上がると、１ｍ２０～３０ｃｍはある。だが犬種はミクシー（雑種）である。母は血統書付きのエアデールテリアで、吾輩の外見は母似である。父はどこからかフラッと来て、母の家の庭の木戸を開けて入ってきたらしい。犬の「フーテンの寅さん」だったのかもしれない。そのままどこかへ立ち去った。そんな訳で生まれた吾輩はご主人の家に貰われてきた。

そのご主人というのは、どうやらお医者さんのようである。えらい院長せんせいのようで、何やらいつも忙しそうにしているが、吾輩の散歩は欠かさずしてくれているのである。

吾輩は若いころはグリーンがかった金髪の上着にやや白っぽいインナーで、ご主人様とともに散歩に行くと、道で会った１０人中９人は私の美しさに目をくぎ付けにされた。

特に制服姿の女子高生は「可愛い」「可愛い」を連発して、道端に立ち止まった。ご主人様は内心鼻高々であるが、素知らぬ顔をして通り過ぎていた。そんな事も吾輩は知っている、吾輩は賢いのだ。

何時ぞや、ご主人の２歳の孫が我が家にやって来た時「パトラをチャイする」と言っておもちゃの刀を後ろに隠して吾輩の方に寄ってきた。親が横にいたので、吾輩はサッサと逃げた。親がいなくなってから、孫の背後からそっと近付いて両手で背中をトンと押した。孫は前につんのめって泣き出した。「ザマー見ろ、我が家のランクでは吾輩のほうが上なんだ、ボーっと生きてんじゃあねえよ！」

第５号

私の心躍る！その時
「世界ぶらり一人旅」

つくし医療・福祉センター　事務員
黒　川　真由美

私の心躍る！その時…それは海外の空港に降り立った瞬間です。雑踏と喧騒、けたたましいクラクションの音、独特の空気と匂いが身体に纏わり付いて来るカオス。それらの全てに心が躍ります。

若い頃、とにかく海外を歩き回ることが好きで、あちこち旅をしました。所謂ツアーというものではなく、往復のAirチケットのみを握りしめ、宿も決めず、その場その場で、さぁ次はどうする？という場当たり的な旅です。日本では感じた事のない、何が起こるかわからないワクワクした気持ちが沸き上がって来る旅、これはもう、癖になり、帰国して３か月もすると禁断症状が現れます。「あぁ～旅に出たい！」そしてまた新たな目的地に向かって旅立ちます。中でもエジプトへの旅は、人生史上この上なく心が躍りました。何度もテレビの中で見ていた数々の遺跡が目の前に現れた瞬間、タイムスリップした様な、異次元に引き込まれた様な、非現実的な空間に鳥肌が立ちました。巨大な石を積み上げたピラミッド、俯瞰で見るそれからはわからない一つひとつの石の大きさに驚き、どの様に運んだの？どう積み上げたの？と考えると、時が経つのも忘れ、妄想が止まらなくなりました。悠久の時の中で確かに生きていたであろうファラオ達の見た景色を、時を経て、自分も見ている…。そして…感動に浸っていると…次に移動する為の飛行機に乗り遅れました。まぁ、何とかなるか…。次のフライトまで３時間、１人くらい席はあるでしょ？と。大きな遺跡を見たら、細かい事を気にすることが馬鹿馬鹿しくなりました。売店の売り子さんと、エジプトの事、歴史、日本の事など色々話をするうちに、自分は母国の事をきちんと外国の人に説明できないなぁ、愛国心が薄いなぁ、宗教感がないなぁと改めて感じました。とはいえ、お互いの国の事を話すのがとても楽しくて、現地の人とのふれあい、これが私が旅をする理由だなぁ…と。多分この時、私の人生観が大きく変わったと思います。

そんな私の影響か、息子もリュック一つで１年かけて世界を１周し、今はオーストラリアで暮らしています。次は、どこの空港で落ち合う？と２人で計画するものの、コロナの流行や、ウクライナ情勢など、海を渡り難い時代になりました。人々が其々の考え方や思いを尊重し、どこでも自由に行き来できる様な日常が早く戻って来る事を切に願いつつ、グーグルマップを見ながら、旅をしているつもりで１人ワクワクしている今日この頃です。

つくしっ子インタビュー！

「和太鼓人生、かっとばせ！」

つくし医療・福祉センター　保育士
峯　本　雄　貴

本日はつくし医療・福祉センターの保育士、和太鼓チームIKORAのリーダーとしても活躍中である峯本雄貴さんのインタビューに参りました。

和歌山つくし会も今年度は通常運営を目指すとともに、センターでの色々なイベントが復活出来ると良いですね。

連日ＴＶからはコロナや戦争など暗いニュースばかり聴こえてきて、憂鬱になりがちですが、今日は響き渡る和太鼓の音とリズム、その勇壮さと魅力について語っていただきましょう！

1．どんな動機で和太鼓演奏を始められたのですか？

和太鼓に最初に出会ったのは１５才の時、学校のクラブです。

元々スポーツ好きで、中学時代はハンドボール部でしたが、紀北農芸高校に進学し、和太鼓部に入りました。それが最初の出会いでした。もう、かれこれ２０年になります。

2．２０年ですか！それはすごいですね！それにしても、高校の和太鼓部ってめずらしいですよね？その後はどういう展開だったのでしょうか？

高校では通常の教科と農業について学ぶ中、和太鼓がもともと農村文化の一部でもあったことから、部活として盛んだったのだと思います。

私自身、和太鼓を続けていくうちに、その楽しさや感動を自分だけでなく、子どもや障がい者の方たち、色々な人たちに知ってもらいたいと思うようになりました。そしてもっともっと人と触れ合う機会が欲しいと考えるようになりました。

高校卒業後、南海福祉専門学校で保育士の資格を取り、卒業後はプロの和太鼓チームと共に活動を始めました。

そして縁あって和歌山つくし会に入職しましたが、自分が演奏活動をしていることを職場の皆さんが気持ちよく認めて下さっていて、本当に感謝しています。

3．ズバリ和太鼓の魅力とは？

まず、「打てば鳴る」ということです。誰にでもできるシンプルな楽器です。でも、奥が深いのです。

その音は、奏者の心と体に響き、同時に聞いている人に伝わり、元気を伝えられる。

悩んでいた人、一歩踏み出せなかった人に「元気を貰えた！」と感想を言われることがよくあります。その時は本当に嬉しいです。

4．自分の元気が人に伝わり、共に元気になる・・・素晴らしいことですね！
もともと、アフリカやアジアを源とする和太鼓を含むリズム・パーカッションは、楽器の中でも最も根源的なものですよね。
和太鼓演奏には大変な気力と体力が必要とされることと思いますが、練習や体力作りのトレーニングは大変ではなかったのですか？

週３回高野山に通って、身体作りの基礎トレーニング、基礎練習、曲打ち練習、楽器の手入れなど大変でした。そのうち自分の身体がそれに馴染んできたように思います。

5．和太鼓演奏の舞台では、ほかの楽器も演奏されるのですか？

はい、２６才から和太鼓のステージで合奏に使う津軽三味線も演奏します。

獅子舞もあります。獅子舞はステージだけでなく、地域の祭礼などで舞うこともあります。

獅子舞は獅子の動きが難しいです。人が踊っているように見えてはいけないので、中々大変ですが、精一杯気持ちをのせて踊ります。

6．和太鼓パワーは人生にどのような影響を！？

やはり、元気とパワー、力が漲る、ということです。

それが自分の人生も変えられる・・・自分も変わったと思います。

２０１１年に和太鼓のプロの登竜門、東京で行われた国際コンテストで第３位をいただきました。その後自分に自信を持つことが出来るようになったと同時に、もっともっと精進したいと思えるようになりました。

しかし、和太鼓だけでは自分を変えることが出来なかったと思います。「つくし会」で色々な人との出会いがあり、障がい児・者の方々や職場の皆さんとの出会い、いろいろな事が相互作用して、どんどん前向きに変わって来ました。

もし、「つくし会」に来ていなかったら、和太鼓しか知らない人間になっていたと思います。

障がい児の皆さんの和太鼓への反応や、スタッフの皆さんが応援してくださる温かい心、福祉の仕事をしながらの和太鼓にこそ意味があるのだと思います。

7．和太鼓以外に趣味はありますか？

実は洋服が大好きなんです！　時々セレクトショップで、好きなデザイナーの服を買って着るのが楽しみです。

（そういえば、ヘアスタイルも大変おしゃれですよね　笑）

『コロナ第７波を乗り越えて』

つくし医療・福祉センター　療育部長
中　前　鹿　奈

２０２２年８月７日に職員１名が新型コロナ感染症陽性となりました。感染が判明し、６日目の朝自宅で出勤準備をしていた時に療育棟から電話が入りました。「今日の日勤の出勤者が誰も来ません！」

早出育成職員の悲痛な声が今も忘れられません。

職員の陽性が判明した後、体調不良の利用者も見受けられず利用者、職員全員を検査しても今までのように陰性の確認ができると考えていました。しかし、２日後の検査結果で利用者２名が陽性者と判明。８月に入り、新型コロナ感染症の流行を鑑み、課長会と感染委員で議論を重ね、感染時のシミュレーションを行いました。そのことにより、物品の準備や初期対応はスムーズに取り組むことができました。

幸い利用者も感染が判明した時点では症状もあまりなく、このまま乗り切れると考えていました。

しかし症状が軽いと思った利用者も、発熱や症状悪化により救急搬送。利用者の検査を行う度に増える陽性者、その度にゾーニングを変え陽性者の部屋移動。発症が分かってから１週間も経たずに第３療育棟で働く職員も次々に体調不良を訴え陽性者に転じていく。第１療育棟、第２療育棟の業務を縮小し応援要請も行いましたが、応援の職員も次々に体調不良を訴え、陽性に転じていく。それでも代わりの職員を送り込まなければいけない。ここは戦場なのかと感じました。

ＰＰＥ（ガウン着用）Ｎ９５着用での業務の暑さ、辛さ、マスクを外して自分も感染すれば楽になるのではないか、そんな気持ちを抱えながら出勤し、感染せずに業務を全うしてくださった職員もいます。今回の変異株は症状も軽いような報道を見聞きしていました。しかし、陽性になり自宅療養の体調を伺う電話口の多くの職員からは、発熱、頭痛、咽頭痛、食欲不振などの辛い様子を聞きしました。感染してしまい、同居家族の体調を気にする不安、決して軽症では済まない現実を目のあたりにしました。

翌日の勤務調整もままならず、療養者の体調を聞きながら、早期の職場復帰を毎日のようにお伺いする。１０日経てば療養者が帰って来る、終わりは必ず来ることはわかっていても辛く苦しい３週間でした。

今回、幸いにも感染の判明したすべての利用者さんの命を守る事が出来ました。また、備品が不足なく感染対策が請じられたこと、休養中の職員も休業補償がされていたことに対し、つくし会の職員で良かったと心より感謝しております。

第３療育棟の振り返りについては課長・主任を中心に、今回感染対応に関わってくださった全職員にアンケート方式で行う予定です。今回、振り返りをするにあたり、いざ文面にしようとすると辛かった事が頭をよぎり筆が進みませんでした。今回経験した事を学びとし、コロナ対策マニュアルに反映させ、情報を共有し、感染にも強いつくし医療・福祉センターを改めて作っていきたいと考えます。

つくしっ子レポート！

「広瀬幼保園に新しい遊具がやって来ました！」

広瀬幼保園の園庭に、新しい木製遊具が設置されました。園児のみなさんは設置工事の様子を窓から眺めながら「早く新しい遊具で遊びたいな！」と心待ちにしていました。

ご覧ください！南仏コート・ダジュールの海岸沿いの街を思わせるような色使い、そして木のぬくもりと不思議にマッチした斬新なデザイン！理事長せんせいも一目で恋に落ちたそうです。

道行く人々からも「あれは何！？」と注目を浴びています。とても素敵ですね！

「さあ、いっぱい遊ぶぞー！」

第７号

もふもふ

つくしっ子ニュース！！

「3匹にゃんこと生きる!!」

つくし医療・福祉センター　事務部長
中　谷　政　紀

私の家では昔から猫を飼っていました。物心がついたころ（だいぶ昔）からずっと猫がそばにいたので、家に猫がいることに何の違和感もなく当たり前だと感じています。

これまで飼っていた猫の長い歴史をたどってみると、いろんな「ツワモノ」の猫がいました。近所の犬を追いかけ、大型犬の背中に乗り爪を立て追い払っていた猫。軽トラの荷台に寝ていたがそのまま車が走り出し２キロほど走った後で飛び降り、２日ほどかけて帰ってきた猫。行方不明になってから６か月後ヨレヨレになって帰ってきた猫。人が散歩をするのを先導してくれた頭の良い猫。ウサギを狩ってきた猫等々・・・。

メロン１６歳　テンテン１６歳

今は３匹の猫がいます。座ればすぐに膝の上に乗ってくる白と濃い茶色の「メロン♀１６歳」、先ほどのウサギのエピソードに出てきたのはこの猫です。

優しい気性で手首が柔らかい、白と濃いグレーの「テンテン♀１６歳」、この子は２本足立ちが得意技です。メロンとテンテンは私の家で生まれた姉妹です。

それから、人の腕枕で寝るのが好きな茶トラの「ブイズ♂７歳」、暴れん坊で甘えん坊です。インターホンが鳴ったら怒り出します。猫たちには本当に癒されます。みんなの長生きを願っています。

ブイズ ７歳

３匹そろって・・・

第８号

連載 第５回

「イタリアで見つけた共生社会のヒント」

つくし医療・福祉センター　リハビリテーション課　課長
川　野　琢　也

今回は、イタリアで最後に訪問した「マジカ・ムジカ協会（Associazione Magica Musica）」について記します。直訳するとMagicaはマジック（魔法）、Musicaはミュージック（音楽）となります。様々な障害を持った約３０名の団員で構成されたオーケストラ公演を主とする団体で２００８年ミラノに設立されました。私たちが訪れた２０１９年時にはオーケストラのみならず、ダンス教室や絵画教室、歌の個人レッスンなど幅広い芸術分野の支援を行っていました。これらの支援を通じて障害のある方の自己表現をすることとアイデンティティの確立、可能性を再発見する場となっていました。さらに、心理士による支援や保護者を対象とした相談窓口の業務も行っており、障害のある方とその家族に対して地域に根ざした支援を行っている団体でした。私たちの訪問時には地元カステッレローネ市の市長、ロンバルディア州の上院議員、警察署長などの地元ゆかりの名士も集い、私たちの訪問を出迎えてくれました。

少し話は変わりますが、今回のイタリア訪問でたくさんの写真や動画を撮っていたのですが、被写体となっている方は障害当事者であったり、訪問先の学校では子どもたちであったため、プライバシーや肖像権の観点から画像の使用が難しかったり、加工するなどして紹介していました。今号で紹介するマジカ・ムジカ協会は多くのメディアに出演し、自身のホームページやYouTubeチャンネルも開設しており（QRコード①）、私たち日本からの訪問の様子もYouTubeにアップされています。今号はその動画等の紹介もさせていただきますので、ぜひご覧になって訪問時の雰囲気を味わってみたり、生の声を聞いていただければと思います。余談ですが私たちの訪問先の全行程に同行し通訳してくださった栗原大輔さんはブラタモリの海外初ロケのイタリア編でも通訳された方でした。イタリアと日本では制度の違う医療や福祉関係の専門用語も解説を交えながら通訳し、毎日１２時間以上にわたって通訳しっぱなしでしたが、いつも笑顔でとても優しく私たちに接してくれました。QRコードのYouTubeにも登場するので紹介させていただきました。

さて、本題にもどります。マエストロ兼マネージャーのピエロ・ロンバルディ氏によってプロデュースされたプログラムは、日本の国歌とイタリアの国歌から始まりました（QRコード②）。日本から訪れてきた私たちを歓迎してくれているピエロ・ロンバルディ氏の姿勢を最初に体感した瞬間でもありました。彼はオーケストラの団員や御家族に対しても相手を敬い、愛情をもって接していることが様々な場面で感じられました。ピエロ・ロンバルディ氏の言葉には幾度となく「尊厳」という言葉が出てきました。一人ひとり違った個性や障害を抱えた人に対して、その方のできる事や得意なこと、また逆にできない事や苦手なことは異なって当然で、その方がオーケストラで何ができるのか、どうすれば参加することができるのかを考えるようにしていると仰っていました。オーケストラの団員は過去に音楽をしていた方というわけではなく、むしろ音楽には全く縁がなかった方がほとんどで、週に1回の練習と対話を積み重ねているとのことでした。

マジカ・ムジカ協会会長のヴィットリア・ロッシ氏は自身の娘が団員で障害当事者でもあります。団員になる前は障害を持った娘の将来を悲観したり、知らない世界に娘を参加させることに恐れを抱いたりしていたそうです。しかし、団員としてオーケストラに参加するようになってからは娘にも特別な能力があり、他人に希望や力を与えることができることが証明された。彼らにはやる気があり情熱もあり、限界を決めていたのは私たちであったと考え方が変わったと仰っていました（QRコード③）。

マジカ・ムジカ協会への滞在は４時間弱でしたが、レパートリーの中から私たちにリクエストした曲を演奏してくれたり、私たち日本の団員が指揮をしたりするなど双方向性で対話形式のオーケストラの時間を過ごしました。またたくさんのお土産をいただき、さらに交流会では夕食もいただきました。イタリアのフルインクルーシブ教育によって作られた包摂された、温もりを感じたひと時でした。最後の訪問先となったマジカ・ムジカ協会は今回のインクルージョンなイタリア社会の集大成ともいえる場所となりました。そして今回の私たちの訪問については後日、地元紙の記事でも紹介されていました（QRコード④）。

私たちが帰国してしばらく後に新型コロナウイルスが全世界で猛威を振るい始めました。初期のころはイタリア全土で多くの犠牲者が出ていたこともまだ記憶にもあると思います。マジカ・ムジカ協会の団員やスタッフも未知なる感染症の恐怖の中、ステイホームで人との交流や対話を制限せざるを得ない状況が続いていたようです。そのような状況下で彼らが制作した動画（ジョン・レノン作曲　「Free as a bird」）もYouTubeにアップされているので、ぜひご覧ください（QRコード⑤）。コロナ禍のステイホームでもメンバーの自宅を通じてつながり続ける努力や、「Free as a bird」に込められた想いも伝わってくるのではないかと思います。

QR コード①　QR コード②　QR コード③　QR コード④　QR コード⑤

みんなであそぼう！

「つくしホールに あたらしいおともだちがやってきた！」

和歌山乳児院　バンビーニ広場・つくしホールに新しい遊具が届きました。
エアーサファリ、ボールプール、ベイビードラゴン、そしてリスコです。

エアーサファリは空気を送り込むとその中でトランポリン遊びが出来ます。
安全で楽しい！こどもたちはもちろん、先生たちも夢中になりました！
ボールプールは夏でなくても大丈夫！プールの中にたくさんのボールを入れて、飛び込みましょう！
ベイビードラゴンとリスコは皆さんとおともだちになりたくてやって来たカラフルな怪獣たち。
見ているだけでも可愛いけれど、背中に乗ってあげると喜びますよ。

さあ、バンビーニ広場・つくしホールであそぼう！

Facciamo amicizia!
おともだちになろう！

リスコ

ベイビードラゴン

ボールプール

エアーサファリ

つくしっ子ニュース！！

つくし幼保園で「おさかな教室」開催

つくし幼保園　保育教諭
土　橋　仁　美

魚を食べたことがあっても実際に捌くところを見たり触ったりする経験の少ない子どもたちのために、フーズファイル（業者）を講師に招いて“おさかな教室”を行いました。

２歳～５歳の子どもたちが、海老や鯛、太刀魚などを実際に見た後、３歳以上児は、魚を触ったり鯛を捌くところを見学しました。

私たちは「子どもたちが触るのを怖がるのでは？」と思っていたのですが、講師から「お魚を触ってもいいよ、どうぞ！」と言われると、我先に魚の口の中を覗き込んでは「歯がある～」と歯に触れたり、目や体を触っては「目、ぷにゅぷにゅしてる！」、「体、つるつるしてるな～」など、感じたことを言葉にしながら面白そうに触っていました。そして、講師が鯛を捌きにかかり鱗が飛んでくると、拾っては大事そうにポケットに入れる子どもや、内臓を見て「どうして緑色なんだろう？」と不思議そうに眺めている子どもがいました。

三枚から切り身となった鯛は、調理場で焼いてもらい、給食で食べることができ、「おいしいね」「もっとたべたいね」と会話しながら嬉しそうに食べていました。

今回の「おさかな教室」は、食育だけでなく遊びの中で魚のことを話題にしたり絵に描いたりなどにも発展していて、貴重な経験ができたのではと思っています。

つくしっ子レポート！

「ＤＷＡＴに参加して」

つくし医療・福祉センター　理学療法士
小　山　有佳乃

令和６年能登半島地震の被災者の方の言葉などが出てきます。この記事で私が伝えたいことは終わりから２段落目に書いていますので、読んでいてしんどくなる方はそこだけでも読んでいただけると幸いです。

２０２４年１月１日１６時１０分、マグニチュード７.６、最大震度は石川県輪島市門前町走出と羽咋郡志賀町香能で震度７を観測した、令和６年能登半島地震が発生しました。消防庁災害対策本部が５月２１日に更新した情報によると、人的被害は死者２４５名、行方不明者３名、負傷者１,３１３名、住家被害は全壊８,５７１棟、半壊２０,４０２棟、床上・床下浸水２５棟、一部破損９４,５５８棟と記されていました。

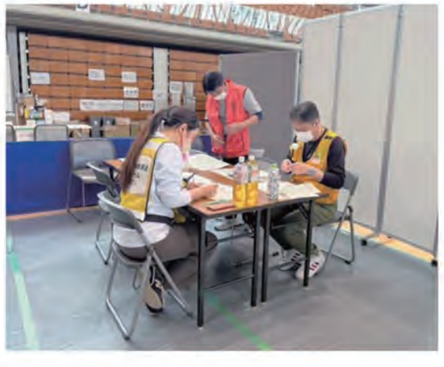
私は２０２４年３月２４日から２９日まで、和歌山DWATの一員として１.５次避難所に指定されている、いしかわ総合スポーツセンターへ派遣されました。DWATとは、「災害派遣福祉チーム（Disaster Welfare Assistance Team）」のことで、大規模災害の発生時に避難所などにおいて、高齢者、障害児・者、妊産婦、乳幼児など、特別の配慮を必要とする方（以下、要配慮者）の支援を行う福祉の専門職などで構成されるチームです。２０１１年３月１１日に発生した東日本大震災において、一般避難所で災害時要配慮者を中心とした災害関連死が大きな問題となり、必要性があげられた専門職チームの一つでもあります。災害派遣でよく耳にするDMATは「災害派遣医療チーム（Disaster Medical Assistance Team）」なのですが、DMATが「大規模な災害やけが人などが多く発生した事故現場などで医療活動を行うこと」を目的にしているのに対し、DWATは「避難所生活により要配慮者が必要なサービスやケアが提供されないためにおこる心と体の状態悪化（二次被害）を防ぐこと」を目的としています。そして、私の派遣された１.５次避難所は、要配慮者とその同伴者を対象とし、災害発生直後に開設された１次避難所などから、自宅の復旧や仮設住宅、２次避難所（ホテルや施設）などへの入居までの間、被災者の生活環境を確保するために設けられる施設です。

派遣された、いしかわ総合スポーツセンターには、約１６０名が避難されていました。震災発生から３か月が経過しようとしていたこともあり、多くの避難者は２次避難所や仮設住宅への申し込みが済んで、入居許可が出るまでの待機中という状況でした。活動では、次の避難先への申し込みの促しや、待機中の方へ進捗状況の確認をしつつ、避難所生活や今後の生活について悩みごとがないかを聞き取ること、震災によるメンタルケアをすること等が求められました。６日間の派遣期間の中で、初日と最終日は移動日となるため、実際の活動日数は４日間です。避難者の

立場からすれば、外部から代わる代わる人が訪ねてきて、話を聞かせてほしいと言いますが、その人は数日するといなくなって、また次の人が訪ねてきます。震災を経験し、自宅や家族、友人、仕事、趣味…いろんな「日常」を失った状態で、他所から来た人に「気軽に、なんでも相談してくださいね」と言われて、十分に相談できる人はどれくらいいるのでしょうか。実際、訪れたときに心無い言葉をかけられることもありましたが、そのような対応になってしまうのも無理はないと感じました。有難くも、訪れているうちに、徐々に悩みを打ち明けてくれる方が多かったのですが、それは同時に震災の経験を共有することでもありました。「もともとは畑仕事を楽しみに生活をしていたけど、避難生活で体力が落ちてもう土いじりはできない」、「たった一人の家族を失って一人ぼっちになってしまった」、「命は助かったけど仮設住宅のある所は知り合いがいない」、「避難所生活で親の介護度が上がってしまい、一緒に仮設住宅へ行きたいけど施設に入ってもらうしかない」。その一つひとつの話が、始めに記した人的被害や住家被害のように目に見える被害ではなく、人の目には見えない被害の大きさを物語っているように感じました。そしてだれもが、「まさか正月にくるなんて…」と口をそろえて言うのです。

皆さんの多くは「地震」を経験したことがあると思います。では、「災害」を経験したことある人はどれくらいいるでしょうか。近畿地方で有名な災害として１９９５年の阪神・淡路大震災があげられます。ほかにも和歌山県では２０１１年の台風第１２号による大雨災害が記憶に新しいのではないでしょうか。そして、近年、南海トラフ地震の話題を耳にすることも多くなりました。日々、生活を送っていると、「なにも起きない当たり前の日常」がこの先ずっと続くものだと錯覚してしまい、有事の際の準備が疎かになりやすいです。しかし、有事が起きていない「平時」にこそ、備えをしておく必要があると、DWATの活動を通じて強く感じました。ぜひ年に１度でもいいので、自分の、そして家族の災害時の備えについて、考えたり、見直したりしてみませんか。取り掛かりやすいのは、物品の確保だと思いますが、それ以外にも避難場所の確認、避難後の合流方法の確認、連絡手段の確認等、「備え」と一言にいっても様々な備えがあります。そして、私たちの働く職場での避難訓練も大切な「備え」の一つだと思います。つくし医療・福祉センターで行われる避難訓練の多くは療育棟内で完結していると聞きました。それも大切ですが、有事の際、座位保持装置に乗っている、またはベッドで寝ている入所者様をどのように避難させるのか、「実際に」行ったことはありますか。屋内のエレベーターや階段が使えなくなった時、どのように避難しますか。日勤帯に発生すればまだ人手がありますが、夜勤帯ではどうしますか。私の所属するリハビリテーション課においても、机上で話し合いをすることはあっても、「実際に」入所・外来の利用者様と共に避難訓練をしたことは、少なくとも私が入職して５年間ありませんでした。災害において、「絶対」は存在しません。想定よりも人が足りないかもしれない、物品が足りないかもしれない、ライフラインが途絶えるかもしれない、そんなことが非常時には当たり前に起こるのです。だからこそ、いろんなシチュエーションを踏まえた避難訓練をして「備え」ておく。読み合わせや職員だけの避難訓練だけでなく、「実際に」災害を想定して経験しておく。経験に勝るものはないのです。そういった意識を職員一人ひとりが持つことが大切だと思うのと同時に、それを実現できるような運営側のサポートも必要だと感じました。

最後になりましたが、このたびの令和６年能登半島地震で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。被害を受けられた皆様が１日でも早く平穏な生活に戻られますことを心よりお祈り申し上げます。



第９号

つくしっ子ニュース！！

満開の桜の中、広瀬幼保園に２２人の新しいおともだち！
（令和６年４月５日）

広瀬幼保園では４月５日に、谷本理事長出席のもと令和６年度入園式が執り行われました。

菫組（３歳児クラス）に７名、土筆１組（１歳児クラス）に７名、土筆０組（０歳児クラス）に８名のお友達が新しく入園されました。

園の前の岡公園の満開の桜が、２２名の園児とその保護者に「おめでとう！」とお祝いの言葉をかけてくれているようでした。

入園式の後の保育教諭によるお祝いの「大型絵本」と「パネルシアター」の催し物で、園全体が笑顔でいっぱいとなりました。

みんな毎日元気に登園してね！

菫組

土筆０組

土筆１組

第１０号

研修「大仙公園とチョコレートミュージアム、須磨シーワールド」（令和６年11月30日）

つくし幼保園　副園長
荒　川　知　子

今回の研修では、大仙公園とチョコレートミュージアム、須磨シーワールドを訪れ、大仙公園の日本庭園では紅葉が見頃で、晴天の青空に赤、橙、黄、緑の色のコントラストがとても美しく、池の水面にその景色が映り込み、まるで絵画を見ているようで感動しました。チョコレートミュージアムでは世界中のチョコレートのパッケージなどが多数展示されていて、可愛らしいものから芸術的なものなど、色やデザインがどれも素敵で思わず手に取ってみたくなるように工夫されているように思いました。

須磨シーワールドではイルカやオルカのショーを見たり、水が生まれ集まり川となってやがて海へとつながっていくように水族館をまわれるようになっているのでそれぞれの場所に生きる魚や水辺の生き物たちを観てまわったりし、その美しさや不思議さ、たくましさなどそれぞれの生き物たちの魅力を感じ取ることが出来ました。

今回は公園、ミュージアム、シーワールドとそれぞれの場所で自然や芸術、生命などの様々な美に触れることが出来、心にたくさんの栄養を取り入れることが出来たように思います。

保育者として様々なものを観たり、触れたりしたときに素直に感動できる豊かな心やこども心を持ち続けられるように、そしてこどもたちが五感で感じられるような体験ができる環境を整え、心豊かに成長していけるような保育の充実に向け、今後も務めさせていただきたいと思います。

「移動ミニ博物館が来たよ！」

（令和６年11月７日）

多機能型福祉事業所「つくしの里」　所長
濵　田　拓　也

多機能型福祉事業所では、２０２４年は利用者も職員も楽しもう！ということで、まず同法人内の保育所との交流を図ることから始めました。和歌山つくし会の事業所内保育所「つくしの里こども園」の石倉園長にお願いしたところ、快く引き受けてくださり、毎月２回＋α交流を続けているところです。

ほぼ毎月色々なイベントを計画、実施していますが、１１月は県立自然博物館が実施している「出張！移動ミニ博物館」をお願いしました。

当日朝９時過ぎには博物館職員が来てくださり、生活介護ルームいっぱいに様々な海の生物が入った水槽やタライが置かれ、キジやメジロイタチやキツネなどの剝製、サメの歯の骨格標本など部屋いっぱいに並べられ、わくわく感満載！１０時前にはこども園から全園児が「おはようございま～す」の元気な挨拶と共に到着、多機能型福祉事業所「つくしの里」の利用者、職員合わせて大盛況となりました。自然博物館には遠足やプライベートで何度か行ったことはあるのですが、剥製を手に取って触らせてもらったり、カニや貝類、その他色々な生き物を身近に体験するのは初めてで、こども園のこどもたち、つくしの里の利用者、何より職員が大興奮で楽しい時間を過ごすことが出来ました。

つくしの里の利用児・者たちも自分の顔が入るくらい大きなサメの骨格を持った時の驚いた表情！今も忘れられません。いい思い出になってくれていると良いな！

何もかもが初体験でこのような機会を設けてくださった自然博物館の皆様に感謝です。

これからもみんなの笑顔を求めて楽しい取り組みをどんどん取り入れていきたいと思います。

「須磨シーワールド」

（令和６年11月23日）

つくしの里こども園　園長
石　倉　芳　美

５年ぶりの研修旅行の再開、私にとりましては和歌山つくし会に入職し８か月目の初めての親睦会でしたが、当日は天候にも恵まれ全職員参加で楽しい一日をすごすことが出来ました。

須磨シーワールドではシャチやイルカのショー、海や山の生物を身近に感じ、ランチは隣接するシーワールドホテルで海を見ながらのビュッフェでたくさんの食材に触れることが出来ました。

この経験を日々の保育に活かし、こどもたちに自然や命の大切さを伝え、人と生き物の共存社会に興味を持てるよう、又食事の楽しさを通して食育につなげることが出来れば、と思います。

職員たちのリフレッシュ、又交流を深めることで新しい発見もあり、視野を広くして日々の業務に取り組んでいきたく思います。

令和６年度職員研修でディズニー・オン・アイスへ！

（令和６年８月11日）

広瀬幼保園では、令和６年度職員研修としてディズニー・オン・アイスの鑑賞を行いました。まず、会場に入ったときからディズニーの素晴らしい世界観が感じられ、ワクワク感でいっぱいになりました。ミッキーとミニーを筆頭に次々と人気のあるキャラクターが登場し、音楽とダンス、スケートの要素を織り交ぜストーリーを展開していくミュージカルショーで、その世界を充分に堪能しました。表現と伝えることの大切さを再確認することができました。会場に来ているこどもたちのキラキラとした幸せあふれる笑顔に触れ、園でもこどもたちにこんな笑顔を与え続けるられることがどれだけ大切か強く感じました。

第 11 号

里親支援センター「なでしこ」 新規採用職員（正規職員）

「つくす」という理念

里親支援センター「なでしこ」　里親等支援員

竹之下　もえこ

２０１４年６月より和歌山乳児院にて約１０年勤務させていただき、２０２４年４月より里親支援センター「なでしこ」にて勤務させていただいております。今まで乳児院では入所しているこどもたちと直接的なかかわりをもってきましたが、里親支援センター「なでしこ」では間接的な支援を求められ、悪戦苦闘する日々が続いております。先輩方に何度も相談し、悩み考えながら１年間すごしてきました。ですが、どちらのかかわりや支援にも共通するのが、つくし会の理念「つくす」ということだと考えます。対象者や支援方法に違いはありますが、相手の方に対して「つくす」という気持ちを持ってこれからも笑顔を忘れず日々精進していきたいです。

里親支援センター「なでしこ」

社会福祉法人　和歌山つくし会　　職員一覧

（2025年10月1日現在）

本　部

理事長	谷本 美佐子	副理事長	森下 宣明	常務理事	西上 邦雄
事務局長	中谷 政紀	参与	林 龍太郎	事務局次長	和田 万智子
総務課長	前田 典子	主任	林 恵子	事務局員	井田 成美
事務局員	野﨑 由美				

和歌山乳児院

院長	小浦 由加里	看護部長	宮井 陽子	看護主任	山田 薫
看護師	土井 正弥	看護師	中西 江里	看護師	土山 佳子
看護師	口井 真理子	看護師	那須 美由紀	看護師	川口 稀子
准看護師	宮﨑 裕子	家庭支援専門相談員	玉置 あゆみ	家庭支援専門相談員	上村 智美
里親支援専門相談員	栗山 佳央理	栄養士	前坂 奈菜	幼児主任	田中 孝子
乳児主任	朝間 素美	個別対応職員	岡 淳子	保育士	江崎 美代子
保育士	羽津 靖子	保育士	中田 里美	保育士	古谷 都司子
保育士	山本 惠理子	保育士	佐藤 喜代子	保育士	戎脇 沙矢
保育士	瀧谷 千賀	保育士	鍛治 幸美	保育士	的場 公美
保育士	大串 春菜	保育士	松田 小百合	保育士	中西 恵美
保育士	吉原 千珠	保育士	谷口 智香	保育士	前田 希穂
保育士	吉田 裕加里	保育士	土橋 佳代	保育士	岡本 祐希奈
保育士	アブラハム 菜々穂 フェイツ	保育士	伊南 友里恵	心理士	古谷 有佳理
事務職員	上山 真由	保育士	木村 千恵子	保育士	工藤 宏美
保育士	中曽 琢子	保育士	油谷 加恵	保育士	岩前 肖子
保育士	大久保 昌子	保育士	和田 由利子	保育士	丸山 茜
保育士	鵜飼 恵美	保育士	近藤 恵理	保育士	須納瀬 貴子
心理士	西川 晶	心理士	村垣 しおり	心理士	﨑山 麻理
心理士	日下 貴美	助産師	二唐 規江	助産師	寺本 裕水
助産師	数見 千春	内科医	柏井 健作		

和歌山つくし医療・福祉センター

院長 鈴木 啓之	副院長 木村 雅紀	小児科部長 紀平 省悟
医師 井上 美保子	医師 玉置 尚司	医師 赤井 美津代
医師 澤田 晃子	医師 月野 隆一	医師 津秦 建治
医師 柳川 敏彦	医師 小倉 良則	医師 山田 伸
医師 吉益 哲	医師 山本 朗	医師 佐々木 政一
医師 石井 清久	医師 岡安 勤	医師 下薗 英史
医師 早田 聡宏	医師 松浦 昌三	医師 貴志 知生
医師 川本 大樹	医師 井中 将吾	医師 間島 伸行
医師 土橋 智弥	医師 佐々木 俊二	医師 山内 敏樹
医師 土屋 慧馬	医師 山口 敦子	医師 栗山 愛梨
医師 兼子 由梨香	医師 雑賀 彩乃	産業医 松田 信治
歯科医師 小間 早也香	薬剤課長 井畑 伸英	薬剤主任 木村 舞里
臨床心理士 木下 聡士	リハビリ課長 川野 琢也	訓練主任 髙馬 奈津子
訓練主任 河野 綾子	理学療法士 竹下 佳奈子	理学療法士 小野木 達也
理学療法士 烏川 麻佑	理学療法士 濵口 淳	理学療法士 小山 有佳乃
理学療法士 小瀬川 一雄	理学療法士 森井 海貴	作業療法士 中谷 真理子
作業療法士 野呂 朋加	作業療法士 廣原 悠生	作業療法士 田井 春香
作業療法士 髙橋 美咲	作業療法士 北条 ひかる	作業療法士 岩橋 莉子
作業療法士 小村 陽菜	言語聴覚士 岡﨑 大樹	言語聴覚士 中森 麻美
言語聴覚士 阪井 友哉	言語聴覚士 竹内 ゆきの	療育部長 飯田 康人
療育副部長 並松 都紀子	療育課長 矢尾 美和	療育課長 前原 淳子
療育課長 松田 守司	看護主任 岩﨑 伸子	看護主任 岡田 知恵子
看護主任 奥田 有三香	看護主任 山田 優子	看護主任 中西 敏之
看護主任 玉置 博美	看護主任 宮井 佳代子	看護師 田口 寿
看護師 尾上 正人	看護師 壷井 美希	看護師 柴田 喜則
看護師 梅田 尚見	看護師 西野 裕美	看護師 曲里 育真
看護師 喜多 祥子	看護師 仲谷 昭一	看護師 板坂 茂子
看護師 山本 亜希	看護師 谷口 美季	看護師 浦 万正子
看護師 大庭 由美	看護師 土井 妙	看護師 角 友紀子
看護師 峯本 晃子	看護師 髙橋 佐和子	看護師 髙橋 秩世
看護師 前川 裕子	看護師 伴 義明	看護師 土岐 宗資
看護師 佐々木 芳子	看護師 田邉 美和	看護師 山門 都季子
看護師 山崎 由美子	看護師 筒井 喜子	看護師 髙井 春美
看護師 岩橋 志穂	看護師 吉本 利恵	看護師 長谷川 夢月
看護師 大中 遼	看護師 宇野 奈津美	看護師 下平 知沙恵
看護師 唐﨑 まり	看護師 西川 育美	看護師 白柿 まや
看護師 松井 佑歌子	看護師 渡邉 浩介	看護師 岩槻 蒼依
看護師 西田 麻希	看護師 木村 篤弘	看護師 吉福 千恵

和歌山つくし医療・福祉センター

看護師 小西 恵子	療育副部長 山下 敬子	育成主任 小栗 旬子
育成主任 尾上 真一	育成主任 達谷 寛美	育成主任 田中 恭子
育成主任 髙尾 瑞穂	育成主任 海瀬 麻代	指導員 中谷 誠
指導員 大西 豊	指導員 楠本 彩乃	保育士 木村 早織
保育士 大西 好子	保育士 中林 紗里奈	保育士 夏目 朋子
保育士 小林 美里	保育士 甲斐 美幸	保育士 小坂 優奈
保育士 松下 和花名	保育士 坂田 陵哉	保育士 髙岡 洋子
介護福祉士 渡邉 孝章	介護福祉士 中屋 有理	介護福祉士 長 信行
介護福祉士 櫻井 誠二	介護福祉士 大森 るみ	介護福祉士 小野木 順子
介護福祉士 矢出 由美	介護福祉士 小西 亮平	介護福祉士 西山 奈那
介護福祉士 脇田 洋介	介護福祉士 芝 綾子	介護福祉士 福住 貴子
介護福祉士 川﨑 明日香	介護福祉士 平山 和枝	介護福祉士 仲 優弥
介護福祉士 大東 敦子	介護福祉士 田村 沙織	介護福祉士 田中 ひふみ
介護福祉士 中野 道子	介護福祉士 小西 順子	サービス管理責任者 岩橋 秀展
サービス管理責任者 髙石 誠	サービス管理責任者 坂本 理恵	事務部長 楠石 由則
事務次長兼医事課長 貴志 浩之	総務課長 中山 由美子	管理課長 田邉 和久
管理栄養士 田村 佳寿紀	事務員 井関 淳	医療事務生 駒幸 美
事務員 福元 凡子	事務員 吉岡 求実	事務員 髙田 祐唯
事務員 山本 加珠恵	事務員 林 茉裕子	事務員 黒川 真由美
医療事務 辻前 梢	事務員 西上 明里	薬剤師 出合 直美
臨床心理士 深谷 薫	臨床心理士 西川 晶	臨床心理士 﨑山 麻理
臨床心理士 日下 貴美	放射線技師 谷口 豊誠	放射線技師 玉置 修
理学療法士 日美 志織	栄養士 櫻井 優子	看護師 若野 敦子
看護師 桝田 香織	看護師 山田 恵美	看護師 大山 梨沙
看護師 穀田 浩美	看護師 松島 明美	看護師 黒岩 ちあき
看護師 鈴木 廣恵	看護師 濵口 恵子	准看護師 平井 玲子
准看護師 中田 要子	准看護師 尾原 賀代	准看護師 川野 郡子
准看護師 味村 隆子	保育士 峯本 雄貴	保育士 福永 千絵
保育士 田中 宏美	介護福祉士 加百 裕美	介護福祉士 山田 智子
介護福祉士 益田 智美	介護福祉士 久保田 佳子	介護福祉士 林 久恵
介護福祉士 神末 昌典	介護福祉士 山田 和花	介護福祉士 志場 一喜
看護助手 田中 智恵	看護助手 北村 良枝	看護助手 並松 尚美
介護員 小栗 空	介護員 岡下 愛美	介護員 浅川 真綾
歯科衛生士 岡山 由美子	歯科衛生士 豊川 咲子	事務員 中谷 静子
医療事務 明治 諒	医療事務 黒田 凜	医療事務 山崎 倫奈
技能員 山名 敏夫	介護員 楠石 多佳子	介護員 坂本 由美子
介護員 高瀬 博美	介護福祉士 杉本 貴子	

地域在宅支援センター

センター長 飯塚忠史　地域連携室長 中前鹿奈

多機能福祉事業所（児童発達・生活介護・保育所等訪問）

所長 濵田拓也
児童発達管理責任者 小西守美子
看護師 脇田聡子
看護師 竪敦子
指導員 久保久子
保育士 福原律子
保育士 丸山あずさ
介護福祉士 冷水佐衣
介護福祉士 小西隆照
指導員補佐 細野芙美江

相談支援事業所

所長 宇田恒久
相談員 木村史朗
相談員 冨永小代里

訪問看護事業所

訪問看護管理者 石原恵美子
看護師 穴井志保
看護師 廣畑紫穂
看護師 小林愛
看護師 平野玲子
看護師 土谷江利子
看護師 後藤香
看護師 佐野陸子
看護師 石原寛紀
看護師 小倉千佳
看護師 華岡薫

訪問介護事業所

サービス提供責任者 原田匡美
介護福祉士 楠見知春
介護福祉士 出口丈子
介護福祉士 辻本隼己
介護福祉士 上野山怜

広瀬幼保園

園長 上垣内康博
副園長 森美千代
主幹保育教諭 永岡佐和子
保育教諭 柴田里佳
保育教諭 森田美幸
保育教諭 在塚博子
保育教諭 山本惠理子
保育教諭 上野山真生子
保育教諭 花光都茂子
保育教諭 吉村知晃
栄養士 寺村伸子
保育教諭 岡本直子
保育教諭 松本恵実
保育教諭 貴志敦子
保育教諭 柏木千佳子
保育教諭 松本真樹
保育教諭 家嶋美和
保育教諭 東條真帆
調理師 松本絹子
保育教諭 卯野しのぶ
保育教諭 前地優香
保育教諭 井関景子
保育教諭 山内妙子
保育教諭 盛下今日子
保育教諭 瀬見亜佳音
保育教諭 金田綾子
保育教諭 北川真理子
保育教諭 小島佐和子
調理師 大西綾
調理員 藤原紗千
調理員 鈴木美佐
内科医 小林昌和
歯科医 水島恒尚
眼科医 遠藤佳子
薬剤師 鋤柄宣子

つくし幼保園

園長 佐伯正季
名誉園長 岡孝江
副園長 荒川知子
主幹保育教諭 部谷匡子
保育教諭 上岡涼子
保育教諭 土橋仁美
保育教諭 谷口紗衣
保育教諭 飯田孝美
保育教諭 須佐圭穂
保育教諭 林音羽
保育教諭 庄門梓
保育教諭 辻璃子
保育教諭 森以珠美
保育教諭 濵田理美
管理栄養士 西村みつ希
事務員 尾上恵
保育教諭 沖美智子
保育教諭 下城礼子
保育教諭 玉置愛
保育教諭 笠松美代
保育教諭 片岡美幸
保育教諭 吉田博美
保育教諭 野滿さおり
保育教諭 鈴木榮子
保育教諭 西畑智子
保育教諭 久保理愛
保育教諭 谷本奈美子
保育教諭 藪由美
保育教諭 角谷起佐
保育教諭 野口恵里那
保育教諭 嶋京子
保育教諭 中澤英美子
栄養士 藪有希子
栄養士 久松尊美
調理師 平見菜穂子
調理師 吉村美加
調理師 山口淳子
内科医 小林昌和
歯科医 谷口雅彦
眼科医 松本浩子
薬剤師 道野順子

つくしの里こども園

園長 石倉芳美
主任保育士 橋本有加
保育士 中西友美
保育士 上山茉利子
保育士 大江静香
保育士 口井千賀
保育士 玉置弥月
保育士 東絢音
保育士 遠藤優
保育士 本田めぐみ
保育士 滝本多江子
保育士 福田佳代
保育士 黒木優香

里親支援センターなでしこ

センター長 森下宣明
主任 川口由佳
里親トレーナー 和田美幸
里親リクルーター 仲山友美
心理療法士 生駒慎一
里親支援員 原紗代
里親トレーナー 下津瑞穂
里親等支援員 竹之下もえこ
里親等支援員 浜田博子
里親等支援員 西晶子

未来に向けて

今年は（昭和29年）1954年の創業から72年、また社会福祉法人の設立から57年目に当たりますが、「和歌山つくし会」の創業者谷本千鶴初代理事長が目指した「子供たちや障がいのある方々など社会的弱者のためにつくす」という精神が、創業以来利用者の幸せな生活のために懸命に働いてきた職員の努力の積み重ねの中で連綿と継承され、今に生きていることは、和歌山つくし会全職員の誇りであります。

これからも「和歌山つくし会」は、子どもたちや利用者の幸せのために、又これを支える職員の幸せのためにも、未来に向けた持続可能な経営を維持しつつ事業の一層の充実発展を図っていくとともに地域の皆様とのつながりを今後とも大切にし、職員は勿論ですが、利用者やご家族、市民・県民の皆様とともにダイバーシティとインクルージョンに満ちた組織を目指し、微力でありますが、たゆまない努力を続けてまいりたいと考えています。

今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

令和８年6月10日

和歌山つくし会 創業70周年記念誌　編集部

和歌山つくし会　創業70周年記念誌

令和８年6月10日発行

編集・発行　**社会福祉法人　和歌山つくし会**

本　部　〒640-0351　和歌山県和歌山市吉礼字ハッ井486番地の1

TEL. 073-488-7470　FAX. 073-478-1900

事務局　〒649-6215　和歌山県岩出市中迫665

TEL. 0736-69-1772　FAX. 0736-69-5251